

● テーマ ●

耳塚の「霊魂」をどう考えるか

Thinking on the Spirits of Mimizuka



2013年6月11日（火）

● 発表者 ●

魯 成煥

NO Sung-hwan

蔚山大学校人文大学 教授

国際日本文化研究センター 外国人研究員

Professor, College of Humanities, University of Ulsan

Visiting Research Scholar, International Research Center for Japanese Studies

発表者紹介

魯 成煥
NO Sung-hwan

蔚山大学校人文大学 教授
国際日本文化研究センター 外国人研究員
Professor, College of Humanities, University of Ulsan
Visiting Research Scholar, International Research Center for Japanese Studies

略 歴

- 1994 年 大阪大学大学院 文学博士
- 1995 年 蔚山大学校日本学科 教授
- 1997 年 University of Maryland, College Park 来訪研究員
- 2012 年 大韓言語日文学会 副会長
- 2013 年 国際日本文化研究センター 外国人研究員

主要著書

- 『日本の民俗生活』（ソウル：民俗苑、2009 年）
- 『日本神話と古代韓国』（ソウル：民俗苑、2010 年）〈2010 年度 韓国文化観光部指定 優秀図書〉
- 『梧桐島兎神話の世界性』（ソウル：民俗苑、2010 年）
- 『韓日神話の比較研究』（ソウル：民俗苑、2010 年）
- 『古事記』（ソウル：民俗苑、2009 年）〈2009 年度 韓国文化観光部指定 優秀図書〉
- 『日本に残った壬辰倭乱』（ソウル：J&C、2011 年）〈2011 年度 韓国文化観光部指定 優秀図書〉

耳塚の「靈魂」をどう考えるか

はじめに

京都は日本の古都であり、日本を代表する歴史遺産が沢山ある。その中で唯一、今日の京都人が人に見せたがらない史跡がある。それは耳塚である。京都市が編纂した『京都の歴史』の近世編はもちろん、京都の観光地図、あるいは『京都府の歴史散歩』などの基本的な歴史観光ガイドブックも、耳塚に関しては一切触れていない。しかし耳塚は、豊臣秀吉（一五三七―九八）が建立した方広寺、そして秀吉を神として祀る豊国神社の前に存在するのである。

では、耳塚はいつ、誰によって、そしてなぜこの場所（京都市東山区）に造られたのだろうか。現在その入り口にある案内板には、次のように説明されている。

この塚は、一六世紀末、天下を統一した豊臣秀吉がさらに大陸にも支配の手をのばそうとして、朝鮮半島に侵攻したいわゆる文祿、慶長の役（朝鮮史では、壬辰、丁酉の倭乱、一五九二―九八）にかかる史跡である。秀吉の輩下の武將は、一般の戦功のしるしである首級のかわりに、朝鮮軍民男女の鼻や耳をそぎ、塩漬にして日本へ持ち帰った。それらは秀吉の命によりこの地に埋められ、供養の儀がもたれたという。これが伝えられる「耳塚（鼻塚）」のはじまりである。「耳塚（鼻塚）」は、史跡「御土居」などとともに関東に現存する豊臣秀吉の遺構の一つであり、塚の上に建つ五輪の石塔は、その形状がすでに寛永二年（一六四三）の古絵図にもみとめられ、塚の築成から程ないころの創建と想われる。秀吉が惹き起こしたこの戦争は、朝鮮半島における人々の根強い抵抗によって敗退に逢ったが、戦役が残したこの「耳塚（鼻塚）」は、戦乱下に被った朝鮮民衆の受難を、歴史の遺訓として、いまに伝えている。

案内板によれば、秀吉の家来の武將たちは戦功の証しとして朝鮮軍民の耳や鼻を切って持ち帰ったが、それらは秀吉の命によりこの場所に埋められ、霊魂に対する供養が行われた、というのである。つまり、この塚は秀吉によって造られた朝鮮人の耳と鼻の墓だということになる。案内板の説明は訪れる観光客のために書かれたものであり、さほど詳しい



耳塚（京都市東山区）

内容にまでは踏み込んでいないが、耳塚の由来について一定の知識を得ることができても
のだろう。だが、研究者の立場から見ると、案内板の説明だけでは解決不能な疑問点が
次々に浮かんでくる。以下、順不同に挙げてみよう。

第一に、日本の武将たちが鼻と耳を切った理由であり、第二には、証拠として点検した
秀吉が、なぜそれらを捨てずに墳墓を造り供養したのかであり、第三には鼻と耳が埋めら
れているのに、なぜ「耳」塚と呼ばれているのか、第四
には、耳と鼻以外に埋められているものはないのか、第
五に、埋められた鼻と耳は朝鮮人のものだけなのか、第
六に、日本は耳塚をどのように利用してきたのか、第七
に、このような塚があるのは京都だけなのか、第八に、
耳塚を見た外国人はどのような反応をしたのか、そして
第九に、墓を造り供養する行為の根底にはいかなる民俗
信仰があるのか、等々である。

これらの疑問は、耳塚に関する極めて基礎的な質問か
もしれない。しかし、少々意外ではあるが、韓国の学界
では、これらの疑問に対してきちんとした答えを提出し

ていない。だからといって、耳塚に全く関心がないわけではない。歴史学者の李在範や日本語学者の崔官などは、少しずつだが、耳塚に関して言及し始めている。李在範によれば、京都の耳塚は戦果確認のために、軍民を区分せず朝鮮人の鼻と耳を削ぎ取って埋めたものであり、その後、日本が朝鮮より優位にあるものとして、朝鮮侵略を煽る国民動員の理念的な道具として利用された^①。一方、崔官は、姜沆（一五六七—一六一八）が帰国の途中に京都の耳塚を見た際の「晋州城が陥落した後、その首級をここに埋めた」という記述に対して、時代的に見て事実でないと指摘しつつも、耳塚自体は日本軍の武威を誇示するために意図的に造られたものと解釈した^②。このように韓国の学界では、主に歴史的な観点から、京都の耳塚は日本が自らの武威を強調するために造成したものと見る傾向にある。しかし「耳塚」をめぐる問題はそれほど簡単ではない。また、先に挙げた疑問に対して韓国の学界は、本格的な検討を行っていない。それらの問題を解き明かすためには、歴史学だけではなく、霊魂観を取り扱う民俗学的な視点も考慮しなければならないのである。本報告では、先行研究の再検討および国内外の古文書に現れる耳塚に関する内容を総合的に検討することによって、先に提示した問題に対する答えを一つずつ探ってみたい。これらの作業を通じて、京都の耳塚の持つ歴史的な意義を再考する機会にしたいと思うのである。

一 耳塚と秀吉・秀頼・承兌

まず、京都の耳塚は誰によって造られたのだろうか。民俗学者の柳田国男（一八七五—一九六二）は、京都の耳塚は朝鮮人の耳や鼻ではない、と言う。祭儀に使用するために動物の鼻や耳を切った話が、時を経て膨らみ、いつの間にか秀吉と結び付けられて、朝鮮人の耳塚という由来ができてしまったのだ、と解釈した^③。彼は秀吉の命によって日本軍が朝鮮で蛮行を働いた結果だとは考えず、あくまでもそれは伝説であり、歴史的な事実ではない、としたのである。

一方、柳田と同時代の研究者南方熊楠（一八六七—一九四二）は、『征韓偉略』『吉川家文書』『元親記』『日用集』などを典拠にして、京都の耳塚は実際に朝鮮人の鼻と耳を埋めたものだ^④と確信していた。南方によれば、秀吉という人物は甥の秀次（一五六八—九五）の家族を殺し、埋めては畜生墓と呼んだ人物であり、敵を殺したり、殺す代わりに耳や鼻を取ったりすることは何憚ることなく行う人物である。従って耳塚は歴史的な事実^⑤に間違いない^⑥と言いつつたのである。これが初期の日本民俗学における耳塚論争である。柳田は口承文芸を重視する民俗学的な立場を取っており、一方、南方は歴史学的な立場からの解

釈を行っていた。

今日、柳田のように耳塚を伝説として解釈する人はほとんどいない。京都の耳塚は誰が見ても文禄・慶長の役の時、日本軍が朝鮮で人々の鼻と耳を切り、それを持ち帰って埋めたものであり、その事実を否定する人はいない。このことは、日本側の文献である『鹿苑日録』（一五九七年〔慶長二〕）においても確認することができる。同書には、耳塚の造成者は豊臣秀吉だと確かに書かれている。

一方、韓国側の記録には、各種の誤解があったようである。通信使たちの記録、例えば一六〇七年（宣祖四〇）の通信使である慶暹（一五六二—一六二〇）の『海槎録』、一六一七年（光海九）の通信使である李景稷（一五七七—一六四〇）の『扶桑録』、そして一六二四年（仁祖二）の通信使を務めた姜弘重（一五七七—一六四二）の『東槎録』などには、先の日本側の文献とはやや異なる見解が述べられている。その代表的な事例として、慶暹の『海槎録』には、京都の耳塚について次のように書かれている。

倭の都の東郊に、わが国の人たちの鼻塚がある。倭国が戦争する際、必ず人の鼻を切った。それは中国でいう献職のようなことである。壬辰年の乱の時、わが国の人たちから取った鼻を集めて一カ所に埋め、土を被せて塚を造った。秀頼がそこに碑を立

てだが、その内容は「君らに罪があるわけではないが、そのような国の運であったのだ……」というものであった。塹壕を掘り、堀を廻らせて、人の出入りを禁止したという^⑥。

引用箇所に見られるように、『海槎録』は、誰がいかなる目的で耳塚を造ったのか、はつきりとは示していない。ただ、豊臣秀頼（一五九三—一六一五）が深く関与していたと強調している。李景稷の『扶桑録』および姜弘重の『東槎録』は、耳塚の由来についてより詳しく述べており、それらによれば、「秀吉がわが国の人たちの耳と鼻を集めてここに埋め、彼の死後、秀頼が塚を造り石碑を立てた」という。これらの記録が事実だとすると、秀吉の時代には、ただ耳と鼻が埋められていただけだったが、その後、秀頼が封墳を造ったことになる。言い換えれば、秀頼が耳塚の封墳造成、石碑建立、死者への供養などを行ったことになるのである。

だが、それは事実ではない。耳塚は秀吉の生前に完成したものだからである。もし秀頼が耳塚に手を入れたとすると、大仏の再建時であった可能性が高い。当時、徳川家康（一五四三—一六一六）は、方広寺の大仏の再建は秀吉の宿願であり、淀君（一五六九—一六一五）と秀頼がその遺志を引き受けるべきだと強く主張していたからである。秀頼



豊臣秀吉

は家康の主張を受けて再建工事を始め、一六一四年（慶長一九）四月一六日に梵鐘が造られ、建物と大仏も完成し、同年八月三日には大仏開眼供養式が行われる予定であった。これらの再建過程で、秀頼が耳塚の工事を行った可能性は十分に考えられる。

方広寺は秀吉の業績を顕彰し、死後世界のために建てられた寺院である。だから彼の戦勝品である耳塚に手を入れ、封墳をより大きく改修し、周辺を整えるのは当然のことと思われる。また、秀吉は生前、耳塚の法要式が行われた時に、すでにその拡張の命令を下していた。これらを考え合わせると、耳塚は秀吉が造り、秀頼によって拡張されたものだと考えられる。朝鮮通信使の一行は、このような歴史的事実を誤解していたのである。

さて、秀吉は耳塚が完成した際、埋められた靈魂のために盛大な法要式を開く計画を持っていた。これに関して黒川道祐（一六三三―一九一）の『雍州府志』には、次のような興味深い記事が載せられている。



豊臣秀頼

豊臣秀吉公朝鮮征伐の時、かの地において、士卒、韓人の首級を得るときは、海路の迂遠を厭ひ、その首の耳鼻を殺ぎて日本に贈る。公、大仏殿の前に大なる塚を築きて、耳鼻をその内に納め、塔をその上に建て、世に耳塚と号す。……(中略)……この時、秀吉公、西福寺の僧侶を請じて、耳塚の供養を遂げしめんと欲す。しかれども、寺僧、これを肯はず。秀吉公、大いにこれを怒り、つひに寺産を没収し、寺を洛北、七野社の辺に移す。⁽⁷⁾

この引用に見られるように、秀吉は最初は耳塚の供養を西福寺の僧侶に委せるつもりであった。彼が西福寺を選んだのは、この寺がおもに刑場で斬首された人を供養する所だったからである。しかし僧侶たちはなぜか秀吉の要請を断った。その結果、寺刹には財産没収と強制移転の措置が下された。このように、秀吉は耳塚の法要式に強く執着していた。

その後、相国寺僧侶である西笑承兌(一五四八―一六〇八)が耳塚の法要式を総括指揮することになった。承兌は一五九七年八月一六日に秀吉と面談し、同年九月一七日、耳

塚の施餓鬼会法要を命じられた。そこで同年九月二八日に南禅寺・天龍寺・建仁寺・東福寺の僧侶とともに、法要式を行ったのである。

秀吉は韓国人ならば誰もが知っている。ところが秀頼と承兌はほとんど知られていない。いったい彼らは韓国人にとつてどんな人物だったのだろうか。先にも述べたが、秀頼は秀吉の子である。秀吉の死後、その後継者として大阪城に暮らしていたが、家康の攻撃により城が陥落した際、母親の淀君とともに自決して生涯を終えた不幸な人物であった。当時の朝鮮人は秀吉を不倶戴天の怨敵、即ち同じ天の下では一緒に住めない存在、除去すべき相手として捉えていた。当然、秀吉の息子である秀頼に対しても高評価を付けるはずがない。その端的な例として慶暹の『海槎録』には、秀頼が秀吉の子であることを否定する、次のような記事が挙げられている。

秀頼はその母が姦夫と姦淫して産んだ子である。秀吉が死んだ後、姦夫の存在が発覚した。家康はその罪を断じようとしたが、処置が困難であると考え、ただその姦夫を絶島に流した。倭国の人々は歌を作り、秀頼を嘲弄するに至った。

このように、朝鮮人の耳塚を修繕し、石碑まで建てた秀頼は、実は秀吉の子ではなく、

母親の不倫で生まれた息子なのだ、という認識が朝鮮社会には広がっていた。そして秀頼を殺して天下を取った徳川政権の誕生が、あたかも必然であるかのように述べられている。父系血縁中心の朝鮮社会において、秀頼は当然排除されるべき人物だったのである。当時の朝鮮では、怨敵と不義の子が支配者になることはありえず、好ましくも思われなかった。

承兌に対しても、このような否定的な認識は同じであった。彼は現実政治に関与した政治家であり、秀吉のみならず、家康の対朝鮮外交にも重用された外交政策のブレーンであった。彼は朝鮮出兵の際には九州の名護屋まで従軍し、明の使臣を迎え、自ら講和交渉を行った。また、その後、日本側の要請によって朝鮮の四溟堂（一五四四—一六一〇）らが京都に赴き家康と面談を行った時にも、接待役を務めた。さらには、貿易船の許可証発行に関する事務も管轄していた。承兌は外交面において強大な政治権力を有していたのである。また、彼は名護屋で行われた対明講和交渉の時、「秀吉を日本国王に封ずる」という内容を入れようとする小西行长（一五五八—一六〇〇）の懇請を断り、交渉を決裂させた強硬論者としても知られていた。

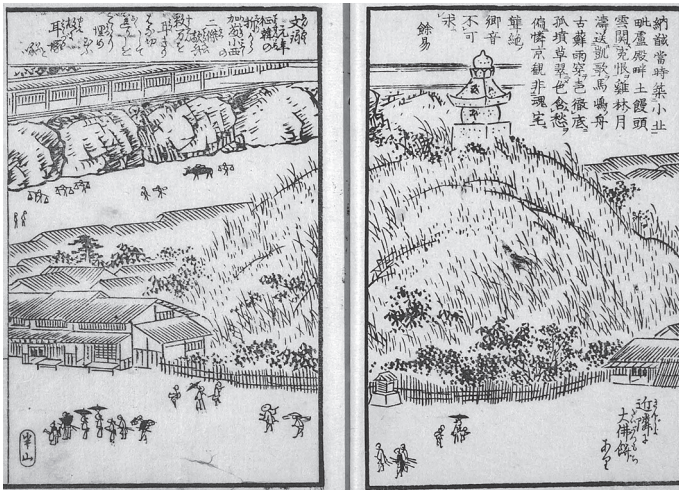
承兌は、戦後、朝鮮が捕虜送還のために派遣した通信使一行を京都で出迎えた。その際、彼は幕府が朝鮮通信使を手厚く接待するのを見て、「朝鮮の使臣は日本に有益な目的のために来たのではなく、兵器や形勢を探るために来たに過ぎない。だから接待は丁寧にしな

「い方がいい」と主張した人物でもある。このような人物に、朝鮮の知識人たちが良い評価を下すはずがない。朝鮮側の記録では、「この坊主は元々貪心があり、陰凶な者で庚寅年（一五九〇）に書契を不遜にしただけでなく、丙申年（一五九六）に詔使を脅迫したのも、すべてこの坊主のせいである」と評価されている。⁽⁹⁾ このように耳塚は、朝鮮人から極めて否定的な評価を与えられた人々によって造成および修繕が行われ、慰霊祭が執り行われたのである。

二 耳塚に眠る靈魂

多くの人々は、耳を埋めたから「耳塚」なのだと思いがちである。だが、早い時期からそれに対して疑問を持つ人がいた。その代表的人物が、東京帝国大学教授の星野恒（一八三九—一九一七）であった。彼は、ここに埋められたのは耳ではなく鼻だと主張した。⁽¹⁰⁾ 元々は鼻塚だったのが耳塚に変わったというのである。

これに対して、韓国の歴史学者・鄭在貞および李在範は異なる見解を出した。彼らは当初から鼻と耳の両方が埋められていたと考えたのである。特に李在範が論拠として挙げたのは、加藤清正（一五六二—一六一一）の家臣・山本安政の記録、および藤堂高虎



19世紀の耳塚絵（『京みやけ二』より）

（二五五六―一六三〇）の家臣・長野喜多右衛門が書いた記録である。李在範は、山本の記録に「文祿年に主に耳を切ったが、朝鮮人の鼻を切り始めたのは慶長の時からだ」とあり、長野喜多右衛門が「朝鮮人の鼻を切り始めたのは慶長年間である」と言及していることを論拠にしたのである¹³⁾。

このような記述は、日本側の文献のみならず韓国側の文献にも見られる。特に日本への外交使節であった通信使の記録には、耳塚に関する記事が数多く登場する。それらの記録では、朝鮮人の耳と鼻がともに埋められたとする見解が圧倒的に多い。例えば慶暹は鼻のみを挙げたが、李景稷は「わが国の人々の耳と鼻を集めてここに埋めた」と述べており¹⁴⁾、姜弘重、曹命采（一七〇〇―一六四）¹⁵⁾、そし

て元重挙（一七一九—九〇）⁽¹⁶⁾も李景稷と同様の見解であった。このように朝鮮通信使たちは、耳塚には耳だけではなく、鼻も入っていると考えていたのである。

また、江戸時代の多くの出版物においても、同様の記述が見られる。例えば醍醐寺の義演（一五五八—一六二六）による『義演准后日記』には、「高麗人の耳と鼻を大仏の西中門の傍に埋め、これを慰撫するために五山の禅僧たちが施餓鬼会を行った」という記録がある。また、一六八四年に出版された『菟芸泥赴』には「耳塚には耳と鼻が埋められている」と書かれており、『石山行程』（一六八九年）や『山城名跡巡行志』（一七五四年）などにも同様の記述がある。以上から、耳塚には鼻と耳がともに埋められていたと見るのが妥当であろう。

では、埋められたのは鼻と耳だけだったのだろうか。実は必ずしもそうではない。直接朝鮮に参戦した大河内秀元（一五七六—一六六六）は、自身の『朝鮮日記』に、「判官は大将なので、首はそのまま、それ以外はすべて鼻を切つて塩と石灰とともに壺に入れ……（中略）……日本に進上した」と記した。⁽¹⁸⁾大将の首はそのまま日本に送られたのであり、そうすると、耳塚には、耳と鼻だけではなく首も収められた可能性がある。

また、晋州城の戦いの記録である『戸川記』によると、当時日本軍は戦死した朝鮮軍人の首を切り、塩漬にして名護屋に送つたという。崔官⁽¹⁹⁾や歴史学者の李離和⁽²⁰⁾らは、晋州城の

戦いで戦死した牧使・徐礼元（?—一五九三）、兵使・崔慶会（一五三二—一九三）らの首は京都に送られ晒された、と言う。そして彼らの首はその後、『毛利秀元記』（巻三）の記述「大仏の前に墓を造り、これを首塚と言った」⁽²¹⁾にあるように、現在の耳塚がある場所に埋められた、と主張している。また一八一四年に発行された『朝鮮記』にも、「大将と知られた十人の首を切り、塩漬し日本に送り太閤に見せた。秀吉はこれらをすべて京都に送るよう仕向けた」という記事が見られる。このように朝鮮側の主要な人物の首は、秀吉に見せた後、おそらくは後に耳塚ができる場所に埋められたのである。

さて、本節の冒頭で記したように、李在範は「文禄の役では鼻を切ったが、慶長の役では耳を切った」という山本安政の記録を紹介しているが、この記録は事実ではない。なぜなら、文禄の役の際にも耳を切ったという記事が散見されるからである。例えば島津忠豊（一五七〇—一六〇〇）は『征韓録』の中で、一五九二年初冬の江原道春川での戦いについて、「今日切り落とした首七十余級、左耳と鼻を切り名護屋に送った」と記録している。⁽²²⁾それだけではない。『清正行状』にも文禄二年（一五九三）、元山で鍋島直茂が兵士三千余を率いて朝鮮側一千三百余の首を切り、その全ての屍体の耳を切り日本に送ったとあり、また同書によれば、同年二月にも金堤などの地域で三三六九名の首を切り、鼻を切り取って、日本へ送っている。⁽²³⁾このように、必ずしも「文禄には鼻、慶長には耳」という

説は成り立たない。ただ、そのような傾向にあったのは事実であった。従つて京都の耳塚には、七年の戦争の間、朝鮮で切り取られた鼻や耳そして首が一緒に埋められた、と考えるべきである。

しかしながら、この墓は、当初「鼻塚」と呼ばれていた。その例は沢山ある。『清正高麗陣覚書』には、「其時、日本人一人役二、朝鮮人ノ鼻三ツ宛テ被当、其鼻高麗ニテ横目衆実檢被仕、大樽二入、塩ヲ仕、日本江被渡候。ソレヲ大仏ノ前ニ塚ヲ築被置候。今ニ至テ其鼻塚、大仏ノ前ニ有之候也⁽²⁾」という記事がある。承兌の『鹿苑日記』も、耳塚ではなく鼻塚と表現している。また江戸時代初期に成立した『豊内記』にも、「スベテ首ヲ刎ネ鼻ヲカイテ日本へ渡シ侍リヌ。今東山ノ麓ニ鼻塚ト云、是ナリ⁽³⁾」と書かれている。このように、造成当初、この塚は耳塚ではなく鼻塚と呼ばれていたのである。

では、いつから耳塚という名前に変わったのだろうか。この点について、ウイキペディアの耳塚の項目には、「林羅山（二五八三—一六五七）がその著書『豊臣秀吉譜』の中で鼻そぎでは野蛮だというので「耳塚」と書いて以降、耳塚という呼称が広まったようである」とある。李在範も同様の見解であり、本来この墓には鼻だけが埋められていたが、朝鮮通信使の宿所が近所であり、彼らに嫌悪感を与えないようにするには鼻より耳のほうが良いと考えたことから、林羅山らが耳塚と呼ぶようになったのだ、と解釈した⁽⁴⁾。しかし、

これらの説明にさほど説得力があるとは思われない。というのは、林羅山はそのような経緯について触れていないし、鼻を耳に変えても、人々に残虐さと嫌悪感を抱かせる点は同じであり、また耳塚という呼称を初めて使ったのも林羅山ではないからである。

これまでの研究成果によると、一六一七年、第二回の朝鮮通信使が京都に赴いた時の様子を描いた「洛中洛外図」（池田本）に「耳塚」と明示されているという。即ち一六四二年の林羅山の『豊臣秀吉譜』よりも相当早い時期から、すでに耳塚という呼称が使われていたのである。⁽²⁷⁾

確かに、絵ではなく文献上で最初に耳塚という名称が現れたのが『豊臣秀吉譜』であることに間違いはない。同書によれば、秀吉の家来たちが鼻と耳を切り取って秀吉に送り、これを秀吉が大仏殿（方広寺）の隣に埋めたのが耳塚だと説明されている。⁽²⁸⁾同書の説明が後代にも大きな影響を与えたようだ。一七二一年に発行された『山城名跡志』では「鼻塚」とされたが、その後の『雍洲府志』等では「耳塚」という名前が定着している。

『雍洲府志』は、林羅山門下の黒川道祐の著書である。その後の京都案内書に絶大な影響を及ぼした書物として知られており、同書の影響を受けた結果、明治初期までに出版された大部分の書物では耳塚と記されるようになっていた。実際に埋められた内容物とは関係なく、「耳塚」が一般的な名称になったのである。要するに、耳塚の名前は「洛中洛外

図」が源流であり、これを林羅山と黒川道祐がそのまま継承した結果、江戸時代以降の京都案内書も耳塚と記すようになったと言える。

では、なぜ日本軍は鼻と耳を切り取ったのだろうか。この疑問に対する解決の糸口は、姜沆の『看羊録』に見られる。同書には、「秀吉がすべての武將に命じて「人に耳は二つあるが、鼻は一つであり、当然朝鮮人の鼻を切り取って首の代わりにするほうがいい。一人当たり一升分を塩漬にして私に送れ。鼻の数が満たされたなら人を捕虜にすることを認める」といった⁽²⁹⁾」との記述がある。ここには、戦果の証拠としては、首よりも鼻のほうが大きさや重さからして遥かに効率的だという発想が示されている。より厳密にいうと、二つある耳ではなく、一つしかない鼻を取るのが古い慣習かもしれない。

それはともかくとして、このような発想はどこから出たものなのだろうか。一七〇五年に刊行された『朝鮮軍記大全』には、「朝鮮在陣の諸將、其敵人を斬獲する処の数ず多きを以て、これを日本へ送んに馘の運漕の難儀なるを、或人ここに思案を廻し、討取る処の敵の首を取りあつめ、実験を終りて後、或は鼻、或は耳削り、其首数のしるしと定めて、日本に送り遣しけるを、秀吉公は見玉ひて、其才覚ある働を感じ喜び玉うにより、其後は諸將達も皆効之に大なる桶に詰させて船に積み、馬に負せて京都まで持運ぶ⁽³⁰⁾」と説明されている。このような説明は広く知られており、例えば田中緑紅（一八九一—一九六九）

が一九三二年に発行した京都の名所写真集『京のおもかげ 下』では、「豊臣秀吉朝鮮を征伐するや、吾が将卒は大勝利をなし敵首をあぐる事数知れず、京に居ます太閤に見せる事ができないのでその片耳をとって塩漬にして送って来た」と書かれている。また、一九七一年頃の耳塚の案内板には、次のように書かれていたという。

豊臣秀吉がおこした文禄、慶長の役（一五九二、一五九七）のとき、ある武将が倒した敵の数を報告するのに、首をもちかえったのでは重いので耳や鼻を斬りとって秀吉に報告したところ、秀吉は大いに喜んだので、武将はみなこれにならって耳や鼻の数を報告した。その耳、鼻を埋めて供養したが、すなわちこの耳塚であるとなつた⁽³²⁾えられる。

以上の説明によれば、首の代わりに鼻を切るといふ発想は秀吉ではなく、朝鮮に出兵したある武将のアイデアのように説明されている。また『征韓録』によると、アイデアを出したのは島津軍の島津又七郎であったともい⁽³³⁾う。しかし、旧参謀本部が出した『朝鮮の役』では次のように書かれている。

慶長二年六月初旬に柳川調信が帰国した。秀吉は調信に「朝鮮がまだ屈服しないのは全羅、忠清の二道が揺がないからである。だから先に発令した方針によって、宇喜多秀家を左軍の将、小西行長をその先鋒として、全羅道に向かい、稲を刈って食糧とし、諸城を攻略して忠清道に入れ」と命じ、また「首級を挙げず、その鼻を取って塩漬にして送れ」と命じた。調信はその月の一四日に釜山に帰りこれを諸将に告げた。⁽³⁴⁾

ここでは秀吉本人から命令が下されたと解釈されている。琴秉洞もまた、様々な日本側の文献を調査した結果、秀吉本人が命令を下したと結論づけている。⁽³⁵⁾ 実際には誰かが秀吉にアイデアを提供した可能性もあるだろうが、ともかく命令を下したのは姜沆の解釈のように秀吉であることは間違いないだろう。

植民地時代に韓国に長く居住した警察官で歴史民俗学者でもあった今村頼（二八七〇―一九四三）は、一五七六年（宣祖九）に日本の海賊が慶尚道の海岸に出没した際、辺将が海賊を退治して、首の代わりに耳を切り取りソウルに送った例を挙げ、日本軍が敵軍の耳を切る行為は朝鮮から学んだのだ、と解釈したことがある。⁽³⁶⁾ しかしこれは事実ではない。歴史学者の清水克行によると、日本において鼻と耳を切り取る行為は中世の文献にしばしば見られるという。⁽³⁷⁾ 例えば一二世紀初めに成立したと推定される『大鏡』に、藤原通雅の

妻が夫を捨てて藤原義忠の妻になったことに対し、大宅世継が「もしこれが私の妻だったならば、白髪を剃って尼にし、鼻も削ぎ落としてやる」と言っている⁽³⁸⁾とある。一二七五年一〇月、阿豆河莊上村の百姓たちが作成した申状に、地頭の湯浅氏が自分の意思に従わな⁽³⁹⁾いと「妻子共々監禁して鼻を削ぎ、髪を切つて尼にする」と脅迫したとある。このように、鼻と耳を切り取る行為は朝鮮とは関係なしに日本で生まれたことであった。

このことを秀吉が知らないはずがない。なぜなら彼自身、一五七一年に一向一揆との戦いで、敵の耳鼻一八〇〇を織田信長（一五三四―一八二）に進上したという記録が『浅井三代記』に見られるからである⁽⁴⁰⁾。部下からその提案があるまで、秀吉が知らなかったということはありえない。

しかし、鼻を取る方法には一つの弊害があった。それが兵士のものか、それとも戦争とまったく関係のない良民のものか区別できないのである。これも支配者側にはよく知られていた。そのために条件が出される場合もあった。例えば『細川幽斎覚書』によると、まず首を取った後、大将から耳・鼻のみを持参する時は、唇をつけて鼻を削ぐようにしたのである。即ち、髭がないと女子のものと同疑われる恐れがあるからである。ただし、若武者の場合は髭のない場合もあるから、その時は相手が携帯していた道具もともに持参する条件が付いていた⁽⁴¹⁾。

これに関する面白いエピソードが、近世初期の戦場体験談『雑兵物語』に載っている。即ち、ある雑兵が戦場で削ぎ取った鼻を主人に見せたところ、主人は「戦場で鼻を削ぐときは、刀の刃を下からもつて行って、くちびるごと削ぎ取るもんだ。鼻だけ削ぎ取ったのでは女の首だったのか男の首だったのか分かりやしない。髭のついたくちびるごと削ぎとってこそ、はじめて「男の首の験」になるんだ」と怒鳴りつけたという。⁽⁴²⁾このように、戦場で取った敵の鼻と耳だということを証明しなくてはならなかったのである。こうした事情を考えると、初期に行われた日本軍の蛮行では、唇が付いた鼻を持ち帰った可能性も十分にある。

特に慶長の役の際は、朝鮮と明の連合軍、そして朝鮮の義兵からの反撃が強かったため、日本軍は次第に窮地に追い詰められていった。これを打開するためか、大河内秀元の『朝鮮日記』に「老若男女僧俗ニ限ラス、賤山カツニ至ル迄、普ク撫切テ首数ヲ日本へ渡スベキ者也⁽⁴³⁾」とあるように、日本軍首脳部は、あらゆる人々の鼻と耳を切る命令を出している。そして日本軍は老人や婦女子をも襲い、鼻を切り取って日本へ送った。さらに衝撃的な証言は、『本山豊前守安政父子戦功覚書』にある「働男女生子も不残撫切に致し、鼻をそぎ、其の日々塩に致し」との記録である。このように、日本軍は、男女はもろろん生まれればかりの赤子までも余さず殺し、鼻を切り塩に漬けて加藤清正のいる蔚山まで送ったのであ

る。⁽⁴⁴⁾

こうした残虐な行為を倦むことなく行つた結果、戦後の朝鮮には、鼻のない人が多数存在することになった。李晔光（一五六三—一六二八）の『芝峯類説』（一六一五年頃）に、「この頃、わが国の人々の中には鼻なしで暮らす人たちがまた多かつた」とあるが、殺さずに鼻だけ切つて持ち去ることもよくあつたのである。韓国において、末世を嘆く時によく使われる「あつという間に鼻が削がれるこの世」という諺も、ひよつとするとこの頃にできたのかもしれない。

さて、前にも触れたように、当時、第二軍団長であつた加藤清正は、自らの兵士には一人当たり鼻三つを切り取ることを命じて相当な戦果を挙げた。これに刺激を受けた他の武将たちも、戦鬪で倒れた朝鮮人の鼻を無残にも切り取つたことは言うまでもない。『大日本古文書』（一九二五年）に収録された『吉川家文書』には、吉川軍だけで一五九七年九月一日から一〇月九日までに三万一千人の鼻を切り取つたと書かれている。⁽⁴⁵⁾

このように、朝鮮では日本軍によつて殺され、また鼻と耳を取られた人は数え切れないほど多かつた。馬山の郷土史学者・趙重華は、日本軍が切り取つた鼻の数は約一〇〇万と推定した。⁽⁴⁷⁾ 在日の歴史学者である李進熙は、京都の耳塚に埋められた朝鮮人の鼻の数は約一〇万以上と推定し、⁽⁴⁸⁾ 鄭在貞は少なくとも四万余名、⁽⁴⁹⁾ また北朝鮮の歴史学者・曹喜勝は、

明軍二万に朝鮮人一〇万余名の鼻と耳が入っていると推定した。⁽⁵⁰⁾

無惨にも切り取られた朝鮮人たちの鼻は、塩・酢・石灰などで防腐処理が施された後、秀吉のいる日本へ送られた。当時、日本軍の各陣営には秀吉から直接任命された軍目付が派遣されていた。彼らは集められた鼻の検分を行った後、大樽一つに鼻一千個ずつを入れて本国に送った。鼻の数で武将の戦果を評価したのである。

大河内秀元の『朝鮮物語』（巻下）には、もう一つの重要な事実が書かれている。それは、耳塚に収められた耳や鼻や首は朝鮮人のものだけではない、ということである。同書は「日本の兵士が切り落とした朝鮮人の首が一八万五七三八人、明人の首が二万九〇一四、都合二万四七五二人である」と記録している。⁽⁵¹⁾つまり耳塚には朝鮮人だけではなく、明軍のものも多数収められていたのである。慶長の役には中国も参戦した。従って、日本軍によって首や鼻が切り落とされた人の中に明軍兵士もいたのは当然であろう。

論拠はいくらでも挙げる事ができる。例えば『清正行状』には、一五九七年二月に鍋島勝茂（一五八〇―一六五七）が全州と金堤で朝明連合軍と激戦を行い、朝鮮軍と明軍三三六九名を殺害し、彼らの鼻を切り取って日本へ送ったという記事がある。⁽⁵²⁾また、一五九七年九月七日、黒田軍が忠清道の稷山で明軍と激戦をし、明軍の死体から鼻を取ったことを示す「鼻請取状」が、福岡県甘木市の秋月郷土館に保存されている。この文書の

特徴は、朝鮮人から取った鼻に対しては何も注記がないが、明軍の鼻に対しては「かくナミ」と書かれていることである。かくナミとは漢南、即ち明軍をさす言葉である。⁽⁵³⁾ また島津藩の『征韓録』には、「一五九八年島津軍が、泗川で朝明連合軍と戦闘をした時、朝明連合軍側から戦死者三万八七一七名が出た」という記録がある。その他にも、『島津義弘公記』や『朝鮮倭寇史』には、朝鮮と明の戦死者の屍体から切り取った鼻と耳を一〇個の大樽一杯に入れて日本へ送ったと書かれている。⁽⁵⁴⁾ また耳塚の完成後、初の法要式を行った承兌は『日用集』の中で、耳塚を「大明、朝鮮の闘死の群霊のために造った墓」だと記している。承兌の別の著書『鹿苑日録』においても、耳塚は「大明朝鮮闘死群霊所築之塚」と表現されている。つまり、この塚に収められた鼻や耳そして首の持ち主は、日本軍に殺された朝鮮人と明軍であった。時代は下るが、一七九九年出版の中井竹山（一七三〇—一八〇四）の『逸史』には、「朝鮮人と明の兵士たちの耳を切り取ったものを集めて京都の方広寺の前に埋めて京観をした」という記事があり、江戸末期に庄内藩の武士・清河八郎（一八三〇—一八六三）が書いた『西遊草』⁽⁵⁵⁾にも、「大明数万の軍兵も此一塚のうちに埋められ、永く我国の漂魂となる、憐れむべき也」という記述がある。

このように、耳塚の中には数多くの韓国・中国の兵士たちの霊魂が収められている。これまで毎年、耳塚で慰霊祭が行われてきたが、慰霊祭の関係者たちは中国人犠牲者の存在

を忘れていたのではなからうか。京都の耳塚に収められているのは朝鮮人のものだけだと解釈し、そのように行動するのは決して望ましいことではない。

三 なぜ耳塚を造ったのか

神龍院の僧侶で神道家でもある梵舜（一五五三—一六三二）の書いた『梵舜日記』によると、耳塚の法要式は一五九七年九月二八日に開かれ、天候は晴れで四〇〇余人の僧侶が香を焚き、経を読み、錢までも撒いて慰霊祭を行ったという⁽³⁶⁾。このように法要式は盛大に営まれたので、見物人も合わせると、当日の耳塚周辺は、人波であふれ返っていたであろう。

秀吉は鼻と耳を戦果の証明にした後、捨ててもよいのに、なぜそうせず、塚を造り供養したのが問題である。それは外国人にとってはなかなか理解しにくく、また他の国には見られない珍しい現象である。これに対しては、次のような理由が考えられる。すなわち、秀吉の武威を誇示するためである。これは承兌の『日用集』に垣間見られる。すなわち、次のような内容が記されている。

予木食上人に逢いて模様を聴く。即今日、大明、朝鮮鬪死の郡靈のために築く所の塚は尤も小也。縦横に広大にし、その後には施食すべき云々、太閤今日御上洛。予、また太閤を待つ、太閤即ち御出洛、予を見て用いる所を問う。施食の儀をこれもうすに、太閤の御意趣は、先に施食を読み、明春、塚をして広大ならしむべしとの由なり。⁽⁵⁷⁾

この記述によれば、秀吉は塚を造成し施食（法要式）を挙行したが、規模が小さいので、翌年に拡張すべしとの命を出している。つまり、戦功を表すことにより、民衆に自身の威勢を示そうとする目的があつたのである。こうしたもくろみは、鼻と耳を秀吉のいる京都まで運ぶ時にもそのまま現れている。堀杏庵（一五八五—一六四三）の『朝鮮征伐記』に「朝鮮で切り取つた耳と鼻を車に乗せて大阪、伏見、洛中を通つて色々な人に見せた⁽⁵⁸⁾」とあるように、送られてきた耳や鼻を載せた車は、主要な町をパレードのごとく練り歩いた。即ち、朝鮮から送られた耳と鼻は、秀吉の勝利と武威を民衆に見せる道具として利用されたのである。また義演の『義演准后日記』九月十二日条にも、「高麗より、耳鼻十五桶上る云々、すなわち大仏近所に塚を築きこれを埋む、合戦日本大利を得と云々⁽⁵⁹⁾」という記事が見られる。ここでも耳塚は、日本の民衆を対象に、朝鮮出兵の大勝利を宣伝し、秀吉の威勢を見せるために造られたモニュメントであることが示されている。

こうした耳塚の効果は、後世の文献からも確かめられる。例えば『太閤記』は、耳塚を「耳、鼻をその中に埋め、後世に残して、その勇名を異邦まで輝せ給ふ」⁽⁶⁰⁾ものと記しており、『朝鮮軍記大全』には、「是を名付けて耳塚と称し、後の世まで我朝の榮觀となさんとす」と表現されており、また『朝鮮物語』には、耳塚は「和漢兩朝末代の名譽に備ふべきものと書かれている」⁽⁶¹⁾。それだけではない。『朝鮮征伐記』は、耳塚を「日本末代までの威光赫赫たれば、鼻塚と名づけ、兒童も其徳を頌せり」と記録した。⁽⁶²⁾ また清河八郎の『西遊草』にも、朝鮮征伐は「日本の武威いかばかりの強みに及びしや。今にいたる迄万威の外国にかがやき、容易に事をいたさぬは、ひとへに太閤武威をあらわし置き功にあらずや」と記されている。⁽⁶³⁾

このような認識は、一八九五年に出た京都の観光案内書『京華要誌』にもそのまま継承されている。同書には、耳塚は人々に秀吉の雄武を思い出させるもの、と叙述されている。このように、耳塚は国内の人民に自らの武力を誇示するために造られたものであった。京都の耳塚は秀吉の武威誇示のために創られ、そのような記念建造物と捉える見解が多いことは否定できないだろう。

第二は、第一の点とも関連するが、耳塚は戦利品として造成されたとも見られる。なぜなら耳塚の位置が秀吉の墓と豊国神社、さらに方広寺が並ぶ場所の向かい側にあるからで



方広寺



豊国神社

ある。現在は耳塚と豊国神社との間に大きな道路ができ、二つに分かれているが、耳塚が造られた時期を考えると、同一区域にあったと同じである。こうした状況を考えあわせると、耳塚は朝鮮との戦争で獲得した戦利品を収めた戦勝記念物であるとしか考えられない。これと同じ構造が、島津義弘（一五三五一六一九）が建てた高野山の高麗陣敵味方供養塔にも見られる。塔は独立的な空間にあるわけではなく、島津家の墓域の前に建てられている。

すなわち、墓域の入り口に鳥居があり、その奥に島津父子の墓がある。これは秀吉の墓の前に宗教施設である豊国神社と方広寺があるのと一致している。言い換えれば、これらは自分たちの戦果を証明する戦利品だったのである。耳塚が方広寺と豊国神社の前に、また敵味方供養塔が島津家の墓域の前になくて

はならない理由がここにある。

第三は、伝統的な戦死者の供養に従った結果とも見られる。敵軍を殺し、その数を確認した後、墓を造って供養したのは秀吉が初めてではない。数多くの戦いを経て社会を形成してきた日本では、敵軍の首の数が戦功の評価基準となり、戦が起ころるたびに多くの首が切り落とされた。前にも触れたように、こうした首を確認する役職も存在していた。敵軍の首は確認のために集められ、遠方からは味噌や塩に漬けて運ばれた。検査が終わると屍体や首は一カ所に集められて土中に埋められ、そこには盛り土がなされ、塚と呼ばれた。重要人物の首は別に取り扱われ、通常、戦勝物として晒された後に埋められ、その上には墓石が置かれた。日本全域に首塚という塚があるのはまさにそれである。

また、敵の耳を塚に埋め、供養する例も実在した。平安時代中期、「前九年の役」という九年ほども続いた討伐戦が行われた。国司の命令に服従しない安倍頼時（?—1057）を討伐するため、源頼義（988—1075）・義家（1039—1106）父子が陸奥国に出征し、結果は頼時の敗北で終わった。この時、勝利を収めた頼義は死力を尽くした敵に敬意を表し、戦死した敵軍の霊魂を慰めるために屍体から耳を切り取り、干したものを革袋に入れて京に戻ってきた。六条坊門の北・西洞院の西に持ち帰った耳を埋め、その上に祠を建て、中には等身大の阿弥陀仏を祀った。京都人はこれを耳納堂と呼んだという。

一五七五年、徳川家康が織田信長の援助を受けて、多年の仇敵である武田勝頼と三河長篠で戦って大勝し、勝頼に対して致命的な打撃を与えた。その後彼は、戦死者の死骸を集めて葬ったが、味方の塚が小さいので小塚、敵方のを大塚、信玄塚といった。⁽⁶⁴⁾そして七月二一日、大恩寺の演説に頼んで法会を営んだという。

さらに、朝鮮側の柳成龍（一五四二—一六〇七）の『懲愆録』にも、日本軍が敵の墓を造る例がある。熊嶺の戦いにおいては日本側との激戦の結果、朝鮮側の鄭堪・辺応井など多くの将卒が戦死した。この時日本軍は、朝鮮の兵士の死骸を収めて道端に埋め、大きな塚を幾つか造り、「弔朝鮮忠肝義胆」という標札を残して去ったと記録されている。柳成龍は、おそらく朝鮮の兵士たちが勇猛に戦ったことを敬したのだろうと推量した。⁽⁶⁵⁾このように、敵の塚を造る歴史は秀吉以前から連綿と続いてきたのである。秀吉の耳塚の造成は、歴史的な伝統に従ったものとも言える。

第四に、怨親平等という仏教思想も見逃せない。怨親平等とは、『俱舍論』（第二九）に「諸の有情の類は平等にして親怨あることなし」とあるように、元々は仏教から出た言葉で、最初は門徒に密教を伝授するのに敵味方平等に扱うべきだという意味で使われた。⁽⁶⁶⁾しかし一三世紀の鎌倉時代以降は、敵味方の戦死者の靈魂を慰める、またそのために供養塔を建てる行為を意味する言葉として定着する。この要素が耳塚にも見られる。その例とし

て、承兌の『鹿苑日録』には次のような記事が挙げられている。

相国怨讐の思いをなさず、却て慈愍心を深む、即ち、五山の清衆に命じ、水陸の妙供を設け、以て怨親平等の供養に充て、彼が為に墳墓を築き、これを名づけて鼻塚を以てす。⁽⁶⁷⁾

これをもつて耳塚の造成が、鼻と耳を切り落とされた朝鮮人・中国人に対する秀吉の慈悲の心から出たものとする説明は十分ではないかもしれないが、その背景にある怨親平等という仏教思想までは否定できないだろう。岡山の千鼻霊社では、「たとへ敵兵とは言っても殉国した人々であり、鼻塚を造り、その冥福を祈る」といつて、紀伊六介が朝鮮人の鼻を埋め、塚を造って供養したが、ここにも、怨親平等思想の影響があった可能性が高い。怨親平等により敵軍の靈魂を祀る行為は、決して秀吉が初めてではない。蒙古襲来の時にもあった。戦争後の一二八二年（弘安五）、時の執権北条時宗（一二五一―一八四）は鎌倉に円覚寺を建て、水没した十万の蒙古兵士のために一千の地藏尊を造り奉納した。円覚寺の開山であった僧侶無学祖元（一二二六―一八六）は、「前歳及往古此軍及他軍」という言葉を残した。ここで「前歳」は第一次の侵略を、「往古」は第二次の侵略を指す。そして

「此軍」は日本、「他軍」は蒙古軍を意味する。つまり、それは敵と自軍の合同慰霊祭だったのである。この時、祖元の祈祷文に、「わが軍と敵軍が戦死し、……ひたすら早くそれらを救うようここで祈願し、皆が苦界を越えるよう祈願します。仏界、法界において差がなく、怨親悉く平等でありますように」とあるように、敵味方の合同慰霊祭の思想的な基盤を、怨親平等に求めていることがわかる。

神奈川県藤沢市にある清浄光寺の境内にも、怨親平等に基づく敵御方供養塔がある。一四一六年（応永二三）、上杉禅秀が幕府に不満をもつて反乱を起こしたが、鎮圧された事件があった。この際、戦死した両陣営の人々のために、一四一八年にこの寺の僧侶太空が建立した塔である。「在所々において敵御方、箭刀水火に落命の人畜亡魂、皆悉く浄土に往生せしめんがため」と刻まれているように、ここにも怨親平等思想の一面が見える。このように、敵味方とともに供養する怨親平等思想は、鎌倉時代から伝わる死者への供養法であった。秀吉もこの思想に基づき耳塚を造成したと見られる。にもかかわらず、一部ではこれを秀吉の「慈救心」または「慈仁」から出た結果として解釈したり、またその行為を日本人の博愛精神あるいは立派な国民性の発露と見たりしているが、これらの見解はあまりにも本質からかけ離れたものではなからうか。

第五に、怨霊を鎮魂するための行為としても解釈できる。戦争は敵と味方を問わず、多

くの死者を出すものである。敵軍の死体を収拾して墓を造り供養するのは他国では非常に珍しいことであるが、日本では決してそうではなかった。これについて宗教史学者の村上重良は、次のように興味深い解釈をしている。

御霊信仰が民間にひろく普及するとともに、災害、海難等の事故で変死した者は、とくに手あつく葬り、その死霊を招き慰めて怨念を晴らし、祟りが来ないようにする宗教習俗が定着した。なかでも戦争は、そのたびに無残な死者をつくりだし、その死霊は、敵味方の区別なく、怨霊となって祟ると恐れられた。古代末期から中世をつうじて、戦乱がおこるたびに、戦闘のあとでは、祟りを恐れて戦死者の供養が行われるのが常であった。仏教の怨親平等の思想も浸透して、戦死者は敵味方を問わず、あつく供養された……朝鮮の役では出陣した島津義弘、忠恒父子が、一五九九年、高野山に朝鮮の陣の弔魂碑を建て……敵味方の戦死者を弔った。敵味方とともに弔祭する行為は、祟りを恐れるという切実な動機から発するものではあった。¹⁾

つまり村上は、戦死者の霊魂を祀る行為の裏には怨霊に対する恐怖があったと見なしたのである。即ち、彼らの霊魂は怨霊になり、社会に脅威をもたらす祟り（災害・疫病）を

起こすので、これを防ぐために手厚く供養する伝統が日本にはあったと説明している。前にも見た無学祖元の表現を借りると、彼らは「戦死し、溺死した衆生の魂が帰するところなく彷徨う」(戦死与溺水、万象無帰魂²⁷) 餓鬼のような存在であり、祟りを起こす可能性の高い危険な怨霊であった。彼らの魂を慰める鎮魂祭を行うことにより、社会的安定を狙ったのである。この事例は日本の歴史上いくらでも探すことができる。そのうち、秀吉以前の事例をいくつか見ることにしよう。

七二〇年頃、南九州の隼人たちが反乱を起こした際、大和朝廷の命を受けて討伐を行った宇佐八幡軍は、隼人の首長の首を宇佐まで持ち帰り、松隈に埋めて供養した。これを凶土塚という。一説によると、首を埋めた後、疱瘡がはやり、凶作が続くと、人々は隼人の祟りだと噂し、これを解消するために神社を建て、毎年放生会²⁸を行ったという。百体神社が、隼人の魂を祀る神社だといわれている。このように、八幡軍による凶土塚と百体神社の造成と建立は、まさに怨霊を鎮魂するためのものであった。

こうした例は、一三三九年、後醍醐天皇(一二八八―一三三九)が死亡した時にもあった。その際、天皇を敵に戦った足利尊氏(二三〇五―五八)・直義(二三〇六―五二)兄弟が、天皇の冥福を祈るために天龍寺を建立したのである。『太平記』は天龍寺の建立を、「近年天下のさまを見候うに、人力をもつていかでか天災をのぞくべく候。なにさまこれ

は、吉野の先帝崩御のとき、さまざまの悪相を現じござ候けると。その神靈おん憤りふかくして、国土にわざわいを下し、禍をなされ候とぞんじ候⁷⁴』という夢窓国師（一二七五—一三五二）の進言によつたものと記述している。即ち、後醍醐天皇の崇りを防ぐために寺院を建てたのである。

こうしたことが、一四世紀の明德の乱にもあつた。一三九一年、反乱を起こした山名氏清（一三四四—一九二）を足利義満（一三五八—一四〇八）が鎮圧した後、山名軍八七九人、幕府軍一六〇人の戦死者のために法華経七部を書き写し、五山の僧侶一千人を呼んで大施餓鬼会を行った。また彼らのために成就寺を建立するとともに、氏清の首を丁寧に埋めた。『明德記』に「内野大宮の戦場には夜よに修羅鬪戦の声聞こえて、時々合戦死亡の苦をいだく音のみ人の夢にも現にもみえきこえける間、敵味方の討死共猶怨害⁷⁵」と表現されているように、義満の敵軍への供養と成就寺の建立は、戦死者の怨霊が起こす崇りを防ぐためのものであつた。

一四六七年にも同じことが起こつた。松平親忠（一四三二—一五〇二）が井田野の戦いで敵軍を殲滅した後、彼らの死体を一カ所に集めて塚を造り、これを千人塚といった。またこの靈魂のために僧侶を招き、弥陀三尊を祀つて七昼夜念仏を唱えた。その後、この魂のために大樹寺を建立した。『大樹寺日記』に「聖靈昼夜の苦患を責められるゆえか、疫

靈となり、近所近所大疫病⁽⁶⁶⁾」と記述されているように、大衆は疫病の流行を、敵軍の戦死者の怨霊が起こしていると思つた。言い換えれば、こうした庶民の不安を解消するために大樹寺を建立したのである。

このように敵軍のために寺院を建立し、首塚を造り丁寧に供養する背景には、確かに祟りを起こす怨霊に対する恐れがあつた。京都の耳塚の造成も、怨霊に対する鎮魂祭的な要素が強い。朝鮮から持つてきた耳と鼻を方広寺の境内に埋め、塚を造り、また僧侶を呼んで施餓鬼会を行う一連の行為も、以上に見た事例とまったく同じだと言える。つまり、耳塚の造成と供養は、怨霊が起こす祟りを防ぐためにとつた政策でもあつた。

最近、山崎泰正はこれに関する興味深い解釈を行っている。即ち、「朝鮮で鼻や耳を切られた赤子や女性が幾万人もぞろぞろと行列をなして夜な夜な秀吉を苦しめた。それで方広寺の西正面に大きな石塔の耳鼻塚を造つて供養した」という説がそれである。勿論これは事実ではない。承兌の記録によると、最初の耳塚の上には木製の卒塔婆があつた。しかし「洛中洛外図」に今日のような石塔型の五輪塔が見えるので、造成以降早いうちに石塔が造られ耳塚の頂上に置かれたことがわかる。このような秀吉の一連の行為を見ていた民衆は、それを怨霊信仰として受け入れたかもしれない。京都の耳塚が他の事例と異なることがあるとしたら、それはその魂のために建立された寺院がないことである。ところが、



耳塚の五輪塔

耳塚が造成される前の一五九五年に、すでに方広寺があった。さらに方広寺は耳塚を管理し、霊魂の供養を戦前までしてきたので、耳塚のために別の寺院を建立する必要はなかった。

方広寺は、奈良の東大寺のような象徴的役割を果たす寺院を京都に建てようとする秀吉の念願からできたものであった。創建当時、巨大な本堂の中には当時日本で一番大きな仏像が安置されていた。だが、このように始まった方広寺は、決して秀吉に幸運をもたらしたとは言えない。建立以降、方広寺は彼に次々と不幸ばかりを招来した。一五九六年に発生した地震により、方広寺の大仏が倒壊した。その後、秀吉は大仏に対して、「自らの身をも守れないのか」と激怒したと言われている。その後一五九七年七月、大仏の代わりに甲府の善光寺にあった阿弥陀三尊を招いてきた。その年の九月に、耳塚の施餓鬼会が大々的に行われたのである。翌一五九八年、秀吉は病魔に襲われ席から立てなくなった。巷間には、善光寺の阿弥陀如来の祟りだという噂が流れ、

同年八月に阿弥陀如来を善光寺に返すという騒動になった。それにもかかわらず、秀吉は一五九九年八月一八日に死亡した。

秀吉の不幸はそれ以降も続いた。秀頼が一六一四年に方広寺の釣鐘を完成させるが、銘文の「国家安康」「君臣豊楽」という句を問題にした家康が、豊臣政権を倒してしまうのである。言い換えれば、方広寺の建立は秀吉に幸運ではなく滅亡を招来したのであった。その過程で、耳塚の靈魂の祟り説が生じてくるのは当たり前かもしれない。耳塚の造成と供養は、権力者にとっては武威を表す戦利品であり、また怨親平等という仏教思想の影響で手厚く供養したとしても、それを見た民衆は、怨霊の祟りを防ぐための鎮魂祭と捉えたのである。一方、怨霊信仰のもう一つの特徴は、社会に不幸をもたらす否定的な怨霊を、自分に有利な肯定的存在に変えて信仰することである。これを御霊信仰とも言う。例えば、前にも見た疱瘡と凶作を起こした隼人に対し、地元の人々は神社を造り、祟りの神ではなく、疱瘡を防ぐ神、疱瘡の治療に効き目がある神として祀った。これは天満宮信仰にも見られる。太宰府に左遷された菅原道真（八四五―九〇三）の死後、京都に天災が頻発すると、人々は道真の祟りだと解釈した。その後、人々は道真を天満宮に祀り、祟りの神ではなく、学問の神として信仰した。

一〇世紀後半の人物である平将門（?―九四〇）もこの例に属する。彼は朱雀天皇

(九三―五二)に對抗して自ら新皇と称し、東国の独立を標榜して兵を起こしたが、藤原秀郷、平貞盛らが率いる天皇軍により鎮圧されてしまった。『氏郷記』によると、彼の首は切り落とされ京都に運ばれ晒された。不思議なことに将門の首は何カ月たつても腐らず、生きていくかのように目を見開き、夜な夜な「斬られた私の身体はどこにあるのか。ここに来い。首をつないでもう一戦しよう」と叫び続けたので、皆が恐れた。しかしある時、歌人の藤六左近がそれを見て「将門はこめかみよりぞ斬られける俵藤太がはかりごとにて」と詠むと、将門の首はからからと笑い、たちまち空を飛んで関東に帰ったといわれている。この伝承の中で民衆は、将門が関東に帰ったことだけを強調して、家出者を家に帰還させる神、また左遷された人を本社に呼び戻す力を持つ神として祀った。即ち、否定的で怖ろしい存在を、現世利益をもたらす肯定的存在に変えて信仰したのである。

こうした要素が耳塚にも見える。耳塚の近所に住む横山義夫氏(二〇一三年当時八五歳)と、方向寺の住職・木ノ下寂俊氏(二〇一三年当時六五歳)が興味深い事実を教えてください。横山氏は長い間耳塚を管理してきた人であり、耳塚についてのかなり詳しい知識を持っている。彼によると、戦前までは、耳塚の頂上にある五輪の石塔の一部を砕き、財布に入れて持っている、必ず博打に勝つという俗信があったという。現在、石塔の一部が欠けているのは、その俗説を信じた人が持ち去ったからだと教えてくれた。一方、木下氏

によると、十余年前までは、耳の遠い人や耳に疾病のある人が耳塚に参拝すると効き目があるかと手紙で問い合わせる人や、実際に訪ねてきて法要を頼む人もいたという。

耳の病気に効き目があるという俗信は、京都に限った特徴ではない。耳地蔵のある津山市にも、同じ話がある。数多くの耳が一カ所に埋められているので、そのような信仰が生ずるのは、ひよっとすると自然なことかもしれない。一方、前者の博打に勝つという俗信は、一代で成り上がった秀吉の力や強運にすがろうとする依頼心から始まったものと思われる。

それとよく似た事例が、出雲半島の長浜神社にもある。ここは本来、外から国土を引つ張ってきて出雲半島を広げたとされる八束水臣津野命を祀る神社であった。ところが、秀吉が朝鮮出兵の前に参拝して勝利を祈り、その後連戦連勝したという伝承と結び付けられた結果、この神は国土拡張の神から武道の神になり、また今日ではさらに勝負に勝つ神として信仰され、スポーツの試合前には多くの人々が参拝するようになった。領土拡張の神が勝利の神に変わったのである。秀吉が建てた耳塚にもこのような変化が生じ、耳塚の石塔は博打で勝利をもたらす呪力を持つものとして信仰されたのである。実際、秀吉を神として祀る豊国神社は、「勤勉、知略、機転、体を張った勇気で低い地位から出世街道を上り詰め、天下人になった勝ち組の一人」ということで、「勝ち」「金運上昇」のお守りを

売っている。こうした影響で、塚に祀られた魂は、怨霊から耳の疾病を治す神、あるいは博打世界で勝利をもたらす神として、日本の民俗社会に適合するよう変わっていったのである。このように耳塚は、日本社会に様々な形で受け入れられていく。

四 日本人は耳塚をいかに利用したのか

秀吉の死後も耳塚はなくならなかった。家康やその後継者たちも、耳塚の政治的価値を理解していた。長期の戦争が終わり、朝鮮との国交が正常化して通信使外交が始まると、日本側は政治的な目的のために、耳塚をわざわざ朝鮮通信使に見せようとした。さらに日本側は、大仏殿（方広寺）での接待を慣例化しようとした。例えば第二回の通信使一行が伏見で将軍と面談した帰りに、彼らの昼食を方広寺でとるようにしたのである。その結果、初期の朝鮮通信使たちは耳塚を見ることになった。

その後の日本側文献は、朝鮮通信使一行が耳塚に参拝したことを大いに誇張して表現した。一七五〇年に木村理右衛門が書いた『朝鮮物語』は、「朝鮮人來朝の度ごとに、此つかのもとにいたって日本の武威をおそろとおそるとぞきこへし」と述べ、馬場信興の『朝鮮太平記』は、「秀吉公が此耳塚を築き給ひて武威を後世に残し給へり。朝鮮人今にいたつ

て、来朝の度ごとに此塚下に至つて、日本の兵威を畏れ感ずるとそ聞へし」と主観的な表現を惜しまない。⁽⁷⁹⁾このように徳川政権は、耳塚を日本の武威を示す宣伝に活用していた。

だが、耳塚の政治的利用に反対する人物もいた。その代表が、雨森芳洲（一六六八—一七五五）である。雨森芳洲は、彼抜きには通信使外交を語れないほどの重要人物であり、当時の日本を代表する外交官であり、知識人であった。彼の『交隣提醒』には、耳塚に關して次のように叙述されている。

耳塚を御見せ被成、日本之武威をあらはさるへくとの事と相聞へ候へとも、なにも飄逸なる御所見二候。……（中略）……耳塚とても豊臣家無名之師を起し、両国無敵之人民を殺害せられたる事に候へハ、其暴悪をかさねて可申事に候而いつれも華耀之資には成不申。却而我国之不学無識をあらはし候のミニ而御座候。正徳年信使大仏へ被立奇候節耳塚をかこはれ、享保年ニも其例を以朝鮮人の見申さぬ様ニ被成候。是ハ誠に盛徳之事たるへく候。⁽⁸⁰⁾

彼は、秀吉が起こした戦争は名分もなく、両国の無数の人命を奪つた暴悪な行為だと定義し、その結果としてできた耳塚を朝鮮通信使一行に見せることは武威を繰り返し誇示す



耳塚を観るオランダ人（『都林泉名勝図会』より）

ることであり、とんでもない日本人の無知と非常識を表すのと同じだと厳しく批判したのである。

一七九九年刊行の秋里籬島（？—一八三〇）著『都林泉名勝図会』には、オランダ人が耳塚を観る絵が載っている。そこには「秀吉が西の地域を征伐して、計策が完了し凱旋した。過去に京観するため耳塚を建てた。泰平の日に入貢してきたオランダ人がそれを見て、（耳塚は）彼らの肝膽を寒からしめた」という説明文がある。⁽⁸⁾京観とは戦死者の死体を一方所に集めて葬り、戦功を記念するために建てられた合同の墓をさす言葉である。即ち耳塚を朝鮮人や西洋人に見せることで、日本の武威を示す材料として活用したのである。

時代は下り、近代に入っても日本は耳塚を



豊公300年祭記念碑

政治的に利用した。一八九八年の秀吉没後三〇〇年には、「豊公三〇〇年祭」として京都で盛大な祭典を行った。当時、日本は日清戦争を経て朝鮮で次第に西欧の列強を押し退け、有利な立場を占めつつあった。耳塚を修築することで、国民に対し、朝鮮侵略の意味を再認識させる必要があった。⁽⁸²⁾

三〇〇年祭の折には記念碑も建てられた。高さ約三メートル、幅一・二メートル、奥行四〇センチ程度で、題字は皇族出身の陸軍大将小松宮 彰仁（一八四六―一九〇三）が書き、撰文は妙法院の僧侶村田寂順（一八三八―一九〇五）が書いた。その撰文には、彼らが耳塚を新しく修築した背景が明解に表現されている。秀吉が耳塚を造ったのは、敵の死体を京観しなかつた楚王よりも徳のある行為であり、僧侶に供養させたのは、赤十字社の精神とも通ずる慈仁・博愛・礼儀の象徴だと讃えたのである。また朝鮮は日本と「輔車相依」「唇齒相保」の関係にあり、日本は万国に率先して朝鮮の独立を助け、友誼を達成すべきだと主張された。このように、撰文は秀吉が造つ

た耳塚を日韓両国の友誼の象徴だと主張し、東洋の平和を云々しながらも、朝鮮を合併する野心をそのまま表していた。

また、碑文によると、耳塚を新たに整備する際、秀吉の家臣および壬辰倭乱の時に朝鮮を侵略した武将の子孫たちが大勢参加したという。募金運動も活発に行われ、京都市からも寄附金を得て、同年一月三日に着工し、三月二〇日に竣工したという。三〇〇年祭行事を主管した「豊国会」の会長は、当時貴族院の副議長を務めていた黒田長成（一八六七—一九三九）侯爵であった。彼は朝鮮を侵略した黒田長政の子孫である。⁽⁸³⁾

芸能界もまた、耳塚の政治利用に関与していた。歌舞伎の演目には秀吉を主人公とする『太閤記』に題材を採った作品があるが、それらの上演回数は、歴史学者の上田正昭によると、一八五四年から六七年までは一七回に過ぎず、上演場所も京都・大阪がほとんどで、江戸では三回に過ぎなかったという。だが明治期に入ると上演回数は急速に増加、一八六八年から一九一二年までの上演回数は二〇九回にも達したという。⁽⁸⁴⁾ その背景に、当時の征韓論をはじめとする朝鮮侵略の雰囲気があったことは言うまでもないだろう。

また李在範によると、秀吉を題材にした演目の主演俳優は、公演前と公演後、豊国神社および耳塚に参詣したという。⁽⁸⁵⁾ 耳塚は木柵で囲まれていたが、一九一五年五月、伏見の侠客勇山こと小畑岩次郎を中心に人々が大金を喜捨し、自らの名前を刻んだ玉垣で整備した。⁽⁸⁶⁾

玉垣に中村雁治郎、片岡仁左衛門をはじめとする当時の有名な歌舞伎俳優の名前が見られるのも、彼らが秀吉の朝鮮侵略を題材とした演目を演じたからである⁽⁸⁷⁾。

このように、京都の耳塚は政治的な意味が大きかった。それは内向きには自らの優越感を誇る戦勝の記念として用いられ、対外的には武力示威の道具として利用された。近代に入ってから、国民に対して、偽装された海外侵略思想を鼓吹するための歴史的・文化的遺産として利用された。つまり耳塚は、日本が博愛精神と人道主義の国家として偽装する際、政治的にうまく利用されたのであった。

五 耳塚は京都だけのものか

韓国人の鼻や耳そして首を埋めた塚は、京都にしかないのか。そうではなかった。京都以外、いくつかの場所にもあった。例えば福岡県香椎の耳塚、岡山県備前市の鼻塚、同じく岡山県津山市の耳塚がそれである。また、かつては鹿児島にも鼻塚があった。福岡の耳塚に対しては、以下のように柳田国男が比較的詳しく論じたことがある。

筑前糟屋郡香椎村大字濱男の海邊に一の耳塚がある。神功皇后三韓征伐の御帰途に作

らせられたものと云ふそうで、然らばそれが最初である。併し此塚は今日冑塚と云う塚に併んで立つさして大きくもない塚で、土地の人は旧く夙くより真実の耳埋蔵所とは考へて居なかつたらしい。延保年中に之を發いて見た処、方三間高一間許の石室で四尺の太刀が其中にあつたと云う。⁽⁸⁸⁾

この記述に見られるように、福岡の耳塚は神功皇后が新羅征伐の帰路に造らせた、とされている。これが仮に事実であればその耳は新羅人のものとなるのだが、神功皇后はあくまでも神話伝説上の人物である。従つて新羅人の耳塚だとは言えない。また、地元の人も神功皇后によるものとは考えていない。一九七七年に琴乘洞が現地を訪れた時、地元の人には、その塚を蒙古軍と関連づけて説明していたという。実際にそこから出土した遺物には、「南無妙法蓮華經」の文字が確認でき、蒙古軍の日本侵略の際に犠牲になった人たちを供養するための札などであつたという。⁽⁸⁹⁾ このように、この塚は本来蒙古侵略の際に犠牲になつた日本側の無名勇士の碑、あるいは蒙古や高麗の兵士の屍体が埋められた所なのかもしれない。また同所の石碑には「耳塚」ではなく「首塚」と刻まれている。首を集めて埋めた塚が、時の流れとともに、いつのまにか神功皇后と結び付けられてしまったのである。ただ、神功皇后との結び付きは歴史的事実ではないとは言え、敵軍の耳を削ぎ取つて塚を

造るといふ発想自体は否定されていない。このような発想から、耳塚と鼻塚が生まれたのである。

次に備前市の鼻塚については、確かに文禄・慶長の役で犠牲となった朝鮮人（および明軍）の鼻塚であった。この塚は香登の熊山にある尚古園の東にある。尚古園とは、戦死し

た人々の記念塔がずらりと並ぶ公園である。場所柄、京都の耳塚と同じく、戦勝記念として造られた可能性が高い。この塚は現在、四方を石で囲まれた小さな封墳の形をしており、その後ろには小さな祠がある。地元の人々は、この塚を耳塚、百人鼻塚、千人鼻塚などと呼び、後ろの祠を千鼻霊社と呼んでいる。一説によると、そこには朝鮮人の耳や鼻が百人あるといは六万人分も収められているといふ⁹⁰。

また地元の人によれば、備前の耳塚は文禄・慶長の役の際、朝鮮に出兵した宇喜多秀家（一五七二—一六五五）の家来であった六介によって造られたといふ。歴史学者金文吉は、宇喜多が六介に耳塚の造



備前市の耳塚

成をさせたのは、人間の生命を重視するキリスト教の影響で、六介が自分と同じキリシタンだったからだと解釈した。⁽⁹⁾鼻塚を造ることがキリスト教と関係があるとは言えないが、六介の子孫である紀伊條一氏の話によれば、六介はこの地域の出身で、宇喜多の家臣・長船綱直の旗持ちとして朝鮮に出兵し、帰国後、日本に送られた朝鮮と明の兵士の鼻を集めて「敵兵といえども国に殉死したる人達」だといひ、小祠を建立し冥福を祈ったという。彼の死後は子孫が管理を受け継ぎ、今日まで毎年七月二十七日の先祖供養の時には、鼻塚の霊魂への儀礼も欠かしていないという。

現在の鼻塚は昔とは異なり、整備されている。入り口には鼻塚跡という石碑が置かれ、鼻塚は低い封墳の形をなしている。その後ろには先に言及した祠がある。紀伊氏によると、鼻塚の下は絶壁で、これが頻繁に崩れるために敷地が年々狭くなっている。最近、土木工事をした際に、祠は元の場所から後方に移したという。祠は二間になっていて、元来は左に朝鮮人の霊魂を、右には六介の霊魂を祀っていたが、現在朝鮮人の霊魂は帰国しており、⁽¹⁰⁾そこには整備事業の際に寄附した人の名簿が入っているという。

津山市の耳塚は、一之宮という住宅地の中ほどにあり、地元の人々は耳地蔵と呼んでいる。案内板には、郷土史家の松岡三樹彦による次のような文章がある。



津山市の耳地藏

大庄屋だった中島孫左衛門は朝鮮出兵の際、朝鮮人を殺して耳を切り取り戦功の証拠にした。軍令によったことにしても真に悲しいことであるので、帰国の後、ここに墓を造り耳地藏といい、彼らの魂を慰めた。

このように、津山市の耳塚も朝鮮人のものであった。地域の豪族であった中島が朝鮮に出兵して人を殺し、耳を切り取ったものをここに埋めたというのである。地元では、中島は領主の宇喜多に従い戦争に参加したが、その後、帰郷して武器を捨て、営農社業に没頭し、農村発展と福利増進に励み、地域繁栄の礎石を築いた立派な人物である、と評価されている。しかし耳塚の例に見られるように、朝鮮では多くの人々を殺し、耳を切り取る残忍な人物の一人に過ぎなかった。

鹿兒島の鼻塚もまた、文禄・慶長の役の際、朝鮮から持ってきた鼻を埋めた塚であった。島津家の記



高麗陣敵味方供養塔

四方ほどの穴を掘り、埋め直した後に松の木をその上に植えて標としている。⁽⁹⁴⁾一方、『島津義弘公記』では、「此の如く毎戦敵屍を葬り、塚を築き弔事を修むるは、島津陣中の恒例なり。此時も大慈寺、萩原寺、卒土婆を立て以て之を執行せり」と人道主義を尊重するが如く自慢した。⁽⁹⁵⁾それに留まらず、朝鮮に侵略した島津義弘と忠恒の父子は一五九九年、高野山奥の院の自らの墓域に、泗川城で戦死した倭軍・朝鮮人（明軍）の「高麗陣敵味方供養塔」を建てたのである。このように、朝鮮で切り取った鼻と耳そして首の塚は京都以外にも、岡山・鹿児島などにもあったのである。

録である『島津家高麗軍秘録』によると、泗川で三万八千余りの首級を取り、その鼻を切り落とし一〇個の大樽に入れて日本へ送った後、島津義弘が家来の市来孫左衛門に命じて、城門前の丘に一五間四方ほどの大きな穴を掘り、鼻を埋めて土で覆い、大きな塚を造った⁽⁹⁶⁾、とある。ところが埋めて二〇日ほど経つと、腐敗して蛆が生じ塚が崩れたので、再び二〇間

六 外国人は耳塚をいかに見たか

京都の耳塚は、比較的早期からの観光名所でもあった。江戸時代から明治初期まで、京都の名所を案内する書籍には必ずと言ってよいくらい登場し、一九二〇年頃には絵葉書も販売されている。このように耳塚は広く知られていたが、それに伴う批判の声もあった。例えば林羅山は『豊内記』で、朝鮮は仁義を行う国だと述べる一方、秀吉を無道な人であり、耳塚は極悪無道な行為の象徴だと批判した。⁽⁹⁶⁾ また松浦静山（一七六〇—一八四一）も『甲子夜話』で、相手の耳を切り取り塚を造る行為は残忍だと率直な感想を書いている。⁽⁹⁷⁾ このように、日本側にも否定的な視線を向ける人々がいたのである。

こうした耳塚は、西洋人が見ても衝撃的な史跡であった。一九二〇年頃ソウルにいたアメリカ人武官ウィリアム・クロウジアの夫人メリー・クロウジアは、ある時、京都の耳塚を見て大きな衝撃を受けた。それで彼女は一九二〇年一月二一日、当時の朝鮮総督であった齋藤実（一八五八—一九三六）に、「日本は宗主国とみなされることを望んでいるのに、（耳塚は）敵意の炎に油を注ぐ以外何の役にも立たない。過去の争いの心を傷つける遺物は、取り除くのが賢明ではないでしょうか」と、耳塚の撤去を要求したのである。⁽⁹⁸⁾

これには斎藤も同意し、京都府知事と交渉して許可をもらうと答えた。実際に彼は京都の関係者たちと協議を行い、また、当時の知事である若林実成もこれに同調し、市中で売られている耳塚の絵葉書を販売禁止とし、また観光案内員にも特別に取り締まりを厳重にするよう命じた。しかしながら耳塚の撤去と移転に対しては物議を引き起こす素地があるので、今後充分に論議していくと約束しただけであった。⁽⁹⁹⁾

その後も耳塚の撤去は外国人からしばしば指摘された。一九二二年二月、京都在住のアメリカ人H・E・タウンソンは朝鮮総督の斎藤に対し、クロウジア夫人とほぼ同じ意見を述べ、政府の責任による耳塚の撤去を求めた。⁽¹⁰⁰⁾その前年二年一月二〇日にアメリカ・ボルトイモアのある新聞に掲載された記事には、耳塚は残虐性が隠された記憶であり、犠牲者は故郷に返すべきだ、と書かれており、タウンソンはそれを引用しながら、斎藤に適切な措置をとることを要求したのであった。⁽¹⁰¹⁾

しかし、日本の世論は撤去論に対して好意的ではなかった。その例として、一九二二年の『京都日出新聞』には、次のような記事が載せられている。

大仏方広寺境内の耳塚は朝鮮人の耳を埋めた塚であると言ふ事から某外国人が朝鮮総督府に出頭其の撤廢方を願出した。……(中略)……右に就き木下方広寺住職は、

「府では可なり問題にして居り撤廢の意見もある様だが私は先月上京した際水野内務大臣に面会、意見を述べたところ、水野氏は朝鮮には相当理解のある人でもあり撤廢には反対で耳を取った事は残忍の行為かも知れぬが其目的は供養にある訳で立派な国民性の発露である。尚内務省内の史蹟保存会の意見も聞いたが、同じく撤廢には反対で外人には既に了解ある旨解答を与えたとの事であった。耳塚の所在地は今官有地であるが、古来の例により方広寺が管理し、毎朝供養をなして居るから別に問題になる筈はないと思ふ。其れに付けて案内者の訓練が最も必要と思ふ」と語る⁽⁹⁾。

耳塚の撤廢を要求する外国人に対して、当時の内務大臣をはじめとする日本の閣僚たちは、耳塚の造成と保存は供養が目的であり、これはすばらしい国民性の発露だ、とはつきり反対の意思を示していた。このように耳塚は、欧米人が見ても衝撃を受ける痛ましい歴史の遺物であった。まして当事者である韓国人が見たら、果たしていかなる衝撃を受けることであろうか。

実は、かつて耳塚を見た韓国人たちがいた。文禄・慶長の当時、日本軍の捕虜となった大勢の朝鮮人が日本に住んでいた。彼らの中には耳塚を見た人々も多かった。その時の感情は複雑だったに違いない。その状況が、姜沆の『看羊録』によく表れている。これによ

ると、京都に強制的に連行された朝鮮人が耳塚の存在を知り、米を集めて共同で祭祀を行ったようである。その際の祭文作成を頼まれた姜沆は、次のような漢詩を作り、読み上げた。

鼻と耳は西に埋められ丘になり、

長蛇は東に隠れている。

帝昶は塩に漬かり、

鮑魚は香わしくない。

(鼻耳西峙、脩蛇東蔵、帝昶蔵鹽、鮑魚不香)^(四)

姜沆は、朝鮮人の鼻と耳は西の丘に埋められたが、それを造った秀吉は蛇になり東山に埋められたと述べ、さらに、秀吉の屍体は朝鮮人の屍体同様、因果応報によって塩漬けにされ埋められ、腐った臭いを放っている、と痛烈に批判したのであった。

こうした気持ちを抱いたのは、姜沆一人ではなかった。朝鮮通信使一行もまた同じであった。耳塚を見た彼らは共通して、「染み透る痛憤を禁じえなかった」と感情を露わにしている。例えば李景稷は『扶桑録』で、「骨に徹する痛憤」と表現し、^(四)また姜弘重も



耳塚へ参る朝鮮通信使一行（『朝鮮人来朝物語』より）

一六二五年一月一七日に耳塚を見て、「心の痛みに耐えきれなかった」と記した⁽¹⁶⁾。これらの悲憤について、林羅山は『豊臣秀吉譜』に「其後、朝鮮人来貢之時、到塚下、誦祭文而弔之、哭泣曰、是輪死報国者也⁽¹⁶⁾」と書いており、日本側の別の記録『洛陽名所集』（四卷）にも、「耳塚を見た高麗人で涙を流さない人は一人もない」と書かれている。ここでの「高麗人」とは言うまでもなく朝鮮人をさす。

その後、一七一九年、洪致中（一六六七—一七三二）を正使とする朝鮮通信使一行がここに立ち寄った時には、以前とは違って耳塚は垂れ幕で覆われ、道から見えなくなっていたという。垂れ幕の幅は三〇余間（約五四メートル）に達し、それを作るのに掛かった費用は、都合銀三貫にもなったと、徳川幕府の外交文書『通

航一覽』には記されている。⁽¹⁰⁾このように、耳塚を朝鮮通信使の目に触れないようにしたのは、「秀吉の蛮行を批判する根拠を隠そうとする配慮」によるものであった。⁽¹⁰⁾つまり、当時の日本の知識人には、耳塚は決して外国人に自慢するものではないという自覚があったのである。

ところがその後も、通信使の中には耳塚を見た人がいた。一七四八年にこれを見た趙命采（一七〇〇—一六四）は、「人をして憤りに裂かれる」といい、⁽¹⁰⁾また一六四三年に見た南玉は『日観記』で、「耳塚は屈辱を抱いて通らざるを得ない所」と言った。⁽¹⁰⁾このように、その後も一部の通信使は耳塚を見た模様である。これは日本側の記録からも確かめられる。その例が、黒川道祐の『石山行程』にある。これによると、「今も韓人入貢の時、三使以下の使此処を見、従者の中斯役に戦死の子孫あるときは、馬より下り此塚を拝して過ぐ云々」という。即ち通信使一行のうち、高官に当たる三使は見ないが、それ以下の人々は耳塚を見ていた。特に一行の中で家族に戦死者がいた人は、必ず立ち寄って拝して行ったという。このように、長らく朝鮮通信使一行は耳塚を見てきたし、それに対して礼も捧げた。日本側の記録においても、耳塚は朝鮮人の痛憤の史跡として描写されているのである。この心境は、時代を経ても変わらなかった。例えば植民地時代に耳塚を見た朝鮮人は心を痛め、『京都日出新聞』に一文を寄稿している。一九三九年三月一六日、李隋堂は「朝

鮮のお上りさん」という匿名で、「豊国神社前にある朝鮮人の耳を埋めたといふ耳塚が、京都の名所の一つとして挙げられている。いま朝鮮では総督以下内鮮融和のために必死の努力が続けられている。もうソロソロ忘れられてよい名所ではあるまいか」と言い、耳塚は内鮮一体にまったく役に立たず、それが未だに存在するのはおかしいと不満を吐露した。一方で、田中緑紅は『京のおもかげ』において、「太閤は敵ではあるが、又彼の国の勇士である。大仏前に周囲一二〇間堀を廻らした大丘陵を築き五輪石塔を建てて厚く御霊を弔ふた。尚慶長二年九月二八日五山の僧四〇〇人をして供養をせられたと云ふ。流石日本人丈あつて敵たりともかく厚く弔ふたのであるが恐らく朝鮮では此戦歿者の霊を弔ふ何物も残つてはいるまいと思ふ」と述べている⁽¹⁰⁾。

耳塚のように敵を弔うのは日本にしかないすばらしい文化だと強調し、反面、韓国にはこのような史跡は何も残っていないだろう、と人種差別的な思想を憚らずに表現している。だが、それは事実ではない。珍島に倭徳山というところがある。その地名は、一五九七年の海戦で朝鮮軍によって水没させられた日本軍の屍体一〇〇余体が海岸に漂着した時、村人たちが屍体を集めて埋め、墓を造った場所に由来する。即ち、日本軍に徳を施した山という意味である。つまり、自分の領土に侵略してきた敵軍の屍身を収めて墓を造り、葬儀を行った事例が韓国にあったのである。

このような事実を知らない田中緑紅は、京都の耳塚を日本独自の人道主義精神から生じたものだと強調している。当時の日本では、このような解釈が耳塚に対する一般的な認識であった可能性が高い。「朝鮮のお上りさん」という匿名で寄稿した朝鮮人李隋堂は、このような雰囲気鬱憤をぶつけたのである。

その後、李隋堂の文章を読んだ小西雪永という日本人が反論を展開し、「耳塚は美しい日本の武士道精神の表現であり、内鮮融和ばかりではなく、国民総親和に於いても重要な歴史的遺物だ」という論を主張した。これに激憤した李隋堂は、同年三月三〇日、同じ新聞に「御先祖の屍から鼻を削いで持帰ったといふ行為は首級をあげることをもってその勲功とした大和武士の古い習慣を知り得ぬ人々にとって如何なる印象を与へることであろうか」と言い、「比類なき武士道精神と讃へられるところなるにも拘らず、持帰られた鼻の数々が鼻塚となり、耳塚となるのはまだよいとして、今日のごとく京都の名所の一つとして衆人の好奇の対象物となるにおよんで私達にはたへられぬ氣持がするのである。私はこの問題を決して形式上の問題とは考へていない。むしろ私は諸君の感情に訴へたいと思つてゐるのである」と心情を述べている⁽⁴⁾。このように耳塚は、近世・近代の韓国人はもちろん、欧米人にも不快感を与える歴史的な負の遺産であることは間違いない。これは今でも同じではないだろうか。

まとめ

京都の耳塚は豊臣秀吉によって造られ、秀頼によって拡張され、そして承兌により施餓鬼会法要式が行われた。それがその場所にあるのは、秀吉の寺と神社、墓があるからである。即ち、耳塚は秀吉の戦勝記念として造られたものである。そしてこの塚は、名前は耳塚であるが、実際には耳だけではなく鼻と首も含まれている。またそこには朝鮮人だけではなく、明軍のものも含まれている。日本の権力者は秀吉の死後も耳塚を廃止せず、しばしば政治的に利用してきた。内向きには日本の武威を示すものとして国民の統合を図り、対外的には外国人（朝鮮通信使と西洋人）に意図的に見せることで武力を誇示しようとした。我々にとつて耳塚はまさに骨が痛む教訓を伝える史跡であるが、日本の為政者にとつては利用価値の高い史跡であった。

また、朝鮮人の鼻や耳の塚は京都以外にもあった。岡山の備前市や津山市、かつては鹿兒島にもあった。それらのうち、香椎の史跡以外はすべて秀吉の朝鮮侵略と関連がある。耳塚の造成と供養の文化的背景には、武威誇示のための戦利品、伝統的な武士の葬儀習俗、怨親平等という仏教思想、怨霊を鎮める儀礼など多様な要素が含まれていた。



泗川の朝明軍塚にある耳塚

一方、耳塚は外国人にとって衝撃的な史跡であった。一九二〇年頃、アメリカ人がこれを見て衝撃を受け、当時朝鮮総督であった齋藤実に撤去を求めた。耳塚は欧米人にとっても、この世にあつてはならないマイナスの遺産であった。まして当事者である韓国人にとっては言うまでもなかった。このような心境が、朝鮮通信使の記録や植民地時代の京都の日刊紙への投稿によく表れている。今日もそれはまったく変わらない。

さて、九〇年代に入ると、耳塚の霊魂を故郷に返還する運動が起こった。活動の中心となった釜山・慈悲寺の僧侶朴三中は、耳塚の霊魂を故国に還す運動を活発に展開し、その結果、九四年四月二二日、慶南泗川の朝明軍塚の墓域で霊魂を迎える行事が盛大に行われた。霊魂は、京都の耳塚から取った土を瓶に入れたものに納められていた。しかしその後、複雑な経緯があり、耳塚の魂は一時的に慈悲寺で保管されていた。

一九九二年四月、泗川文化院との協議の結果、ようやく朝明軍塚の隣に安置されるに至った。しかし安置された当時は、それを知らせる標識や案内板などが一つもなく、ただ床石一つが置かれていた状態であった。このように放置されていたのを、二〇〇七年に軍塚の聖域化事業が完成し、耳塚の土を納めた瓶は軍塚から二〇メートル余り離れた所に安置され、高さ一・八メートルの「耳塚」と書かれた耳の形の碑石が建てられた。このような点から見ると、耳塚の魂は完全に故国に還った形をとっていると言える。

だが、このような活動が行われたにもかかわらず、耳塚の霊魂すべてが帰郷したと信じる人はほとんどいない。その後も毎年八月・九月になると、京都の耳塚の前では、韓国人と在日韓国人・朝鮮人による慰霊祭が行われているのである。なお、二〇一二年の慰霊祭では、霊魂に捧げる追慕献詩の中で、耳塚の霊魂は中国の隋軍を追い払った高句麗の武将、乙支文徳と楊萬春の末裔に喩えられた。これは、耳塚には朝鮮人だけが収められているという誤った認識の結果である。耳塚には中国人も収められているという、あまりにも当然の歴史的事実を見逃した結果でもあった。

耳塚を通じて過去を反省し、真実の和解と友好の機会にするためには、慰霊祭が韓国人のみのものになってはいけない。韓国と中国そして日本の三カ国が参加する祭場にすべきである。さらに将来、もう一步進んで耳塚をなくし、その場所に耳塚の歴史的教訓を生か

した韓中日の和解と友好平和の記念碑が建てられるならば、それは間違いなく東アジアの平和を目指す新しいシンボルになるだろう。

注

- (1) 李在範「왜 朝鮮人の 코를 잘라 갔다가」『韓国과 日本 歪曲과 콤플렉스의 歴史(2) 자각나무』、一九八八年、二二一—二七頁。
- (2) 崔官『日本과 壬辰倭乱』高麗大学校出版部、二〇〇三年、一七七頁。
- (3) 柳田国男「耳塚の由来に就て」『定本柳田国男集12』筑摩書房、一九六三年、五〇八—一〇頁。
- (4) 飯倉照平編『柳田国男・南方熊楠往復書簡集下』平凡社、一九九四年、三四〇—四五頁。
- (5) 南方熊楠『南方熊楠全集9』平凡社、一九七三年、三三八—四七頁。
- (6) 慶暹著、鄭鳳華訳「海槎録」『国訳 海行摠載2』民族文化推進会、一九八九年、二七〇頁。
- (7) 黒川道祐著、立川美彦訓読『雍州府志』臨川書店、一九九七年、一五一頁。
- (8) 慶暹、前掲書、二七〇頁。

- (9) 慶暹、前掲書、二七七頁。
- (10) 星野恒「京都大仏殿ノ塚ハ鼻塚ニシテ耳塚ニアラザル考」『史学叢説2』富山房、一九〇九年。これは琴兼洞『耳塚』（二月社、一九七八年）の附録〈資料編〉二二二―二八頁に載せられている。
- (11) 李在範、前掲論文、一二二頁。
- (12) 慶暹、前掲書、二七〇頁。
- (13) 李景稷「扶桑録」『国訳海行摠載3』民族文化推進会、一九八九年、七八頁。
- (14) 姜弘重「東槎録」『国訳海行摠載3』二五三―五四頁。
- (15) 曹命采「奉使日本詩文見録 坤 聞見総録」『国訳海行摠載10』民族文化推進会、一九八九年、二四九頁。
- (16) 元重挙著、李慧淳監修、朴在琴訳『華国志』召命出版、二〇〇六年、一〇九頁。
- (17) 『義演准后日記』慶長二年九月条。
- (18) 上田正昭『雨森芳洲』ミネルヴァ書房、二〇一一年、一二四頁。
- (19) 崔官、前掲書、一七七頁。
- (20) 李離和『韓国史 이야기 (1) 朝鮮과 日本의 七年戰爭』한길사、二〇〇〇年、一九四頁。
- (21) 金光哲『中近世における朝鮮觀の創出』校倉書房、一九九九年、二四四頁。

- (22) 北島万次『朝鮮日日記・高麗日記——秀吉の朝鮮侵略とその歴史的告発』そしえて、一九八二年、三〇六頁。
- (23) 琴秉洞『耳塚』二月社、一九七八年、三四—三五頁。
- (24) 金光哲、前掲書、二五〇頁。
- (25) 仲尾宏「朝鮮通信使と耳塚——江戸時代の〈耳塚〉観と壬辰、丁酉戦乱」金洪圭編『秀吉・耳塚・四百年——豊臣政権の朝鮮侵略と朝鮮人民の闘い』雄山閣出版、一九九八年、九五頁。
- (26) 李在範、前掲論文、一二二頁。
- (27) 仲尾宏『朝鮮通信使と壬辰倭乱』明石書店、二〇〇〇年、二三〇—三二頁。
- (28) 仲尾宏、前掲「朝鮮通信使と耳塚」、九七頁。
- (29) 姜沆「看羊録」『国訳海行摠載2』、一七五頁。
- (30) 琴秉洞、前掲書、三五—三六頁。
- (31) 田中緑紅編『京のおもかげ下』（郷土趣味社、一九三二年）に「大仏の耳塚」というタイトルで二枚の写真が紹介されている。一枚は一八七五年、もう一枚は一九三〇年に撮影されたものである。
- (32) 琴秉洞、前掲書、九頁。

- (33) 琴秉洞「秀吉の耳塚建造の意図とその思想的系譜」『秀吉・耳塚・四百年』、六三頁。
- (34) 琴秉洞、前掲『耳塚』、四一頁。
- (35) 同。
- (36) 今村軻『歴史民俗朝鮮漫談』復刻版、国書刊行会、一九九五年、二九五頁。
- (37) 清水克行「耳鼻削ぎの中世と近世」黒田弘子・長野ひろ子編『エスニシティ・ジエン
ダーからみる日本の歴史』吉川弘文館、二〇〇二年、一七七―一九八頁。
- (38) 清水克行、前掲論文、一八〇頁。
- (39) 清水克行、前掲論文、一七七頁。
- (40) 神田千里『信長と石山合戦——中世の信仰と一揆』吉川弘文館、一九九五年、一三七
頁。
- (41) 神田千里、前掲書、一三七頁。
- (42) 清水克行、前掲論文、一九二―一九三頁。
- (43) 北島万次『豊臣秀吉の朝鮮侵略』吉川弘文館、一九九五年、一九六頁。
- (44) 北島万次、前掲『朝鮮日記・高麗日記』、三〇六頁。
- (45) 李暉光『芝峯類説上』乙酉文化社、一九八二年、五三四頁。
- (46) 琴秉洞、前掲『耳塚』、五四頁。

- (47) 趙重華「코무덤의 憤怒」『마로잡은 壬辰倭乱史』삼과 꿈、一九九八年、九九頁。
- (48) 琴秉洞、前掲『耳塚』、六二頁。
- (49) 鄭在貞『京都에서 본 韓日通史』曉溼出版、二〇〇七年、一三二頁。
- (50) 日本の映画監督の前田憲二は、二〇一〇年に『月下の侵略者——文祿・慶長の役と「耳塚」』という作品を完成した。平壤でのインタビューに応じた責は、この点に関して自身の意見を述べている。
- (51) 琴秉洞、前掲「秀吉の耳塚築造の意図とその思想的系譜」、七九頁。
- (52) 琴秉洞、前掲『耳塚』、三五頁。
- (53) 北島万次『秀吉の朝鮮侵略と民衆』岩波書店、二〇一二年、四二―四五頁。
- (54) 琴秉洞、前掲『耳塚』、五六頁。
- (55) 清河八郎著、小山松勝一郎校注『西遊草』岩波文庫、一九九三年、三六四頁。
- (56) 琴秉洞、前掲「秀吉の耳塚築造の意図とその思想的系譜」、八〇頁。
- (57) 琴秉洞、前掲『耳塚』、九八頁。
- (58) 琴秉洞、前掲『耳塚』、一〇九頁。
- (59) 河内将芳『秀吉の大仏造立』法藏館、二〇〇八年、一三七頁。
- (60) 琴秉洞、前掲『耳塚』、一〇七頁。

- (61) 琴秉洞、前掲『耳塚』、一〇六頁。
- (62) 琴秉洞、前掲『耳塚』、一〇九頁。
- (63) 清河八郎、前掲書、三六四頁。
- (64) 圭室諦成『葬式仏教』大法輪閣、一九六四年、二〇二頁。
- (65) 柳成龍著、李民樹訳『懲愆録』乙酉文化社、一九七〇年、一二六頁。
- (66) テレングト・アイトル「戦争と鎮魂——元軍戦死者怨霊追善碑」『北海学院大学人文論集』三二、北海学院大学、二〇〇五年、八九頁。
- (67) 『鹿苑日録』慶長二年九月二八日条。
- (68) 金文吉『壬辰倭乱の文化戦争』慧眼、一九九五年、六五頁。
- (69) テレングト・アイトル、前掲論文、八八頁。
- (70) 山田雄司『跋扈怨霊——鎮魂の日本史』吉川弘文館、二〇〇七年、一八一—八二頁。
- (71) 村上重良『慰霊と招魂』岩波書店、一九七四年、五三頁。
- (72) テレングト・アイトル、前掲論文、八八頁。
- (73) 渡辺勝義「日本精神文化の根底にあるもの——怨親平等の鎮魂について」『現代社会学部紀要』四—一、長崎ウエスレヤン大学、二〇〇六年、四頁。
- (74) 圭室諦成、前掲書、二〇〇頁。

- (75) 山田雄司、前掲書、一八三頁。
- (76) 圭室諦成、前掲書、二〇一頁。
- (77) 山崎泰正『信長、秀吉、京の城と社寺』ふたば書房、二〇一一年、二四五頁。
- (78) ロナルド・トビ「近世の都名所 方広寺前と耳塚——洛中洛外図、京絵図、名所案内を中心に」『歴史学研究』八四二、歴史学研究会、二〇〇八年、一〇頁。
- (79) ロナルド・トビ、前掲論文、一一頁。
- (80) 雨森芳洲『芳洲外交関係資料・書翰集 雨森芳洲全書3』関西大学出版部、一九八二年、六六頁。
- (81) 「豊氏西征、計策完凱旋、曾此築京観、和蘭人貢太平日、猶使遠人肝膽寒」仲尾宏、前掲書、九四―九五頁。
- (82) 李在範、前掲論文、一二六頁。
- (83) 琴秉洞、前掲『耳塚』、一一二―一三頁。
- (84) 上田正昭、前掲書、一三六頁。
- (85) 李在範、前掲論文、一二六頁。
- (86) 高木博志著、小幡倫裕訳「近代日本と豊臣秀吉」『壬辰戦争——一六世紀日・朝の国際戦争』明石書店、二〇〇八年、一九八頁。

- (87) 上田正昭、前掲書、一三六頁。
- (88) 柳田国男、前掲書、五〇八頁。
- (89) 琴秉洞、前掲『耳塚』、一八一—一八四頁。
- (90) 西川宏『岡山と朝鮮』 日本文教出版、一九八二年、八五頁。
- (91) 金文吉「宇喜多秀家と六助に関する研究——備前市香登にある「鼻塚」について」『比較文化研究』5、釜山外国語大学校文化研究所、一九九四年、六三一—六五頁。
- (92) 朝鮮人の鼻塚がここにあることが知られると、釜山慈悲寺の僧侶朴三中が中心となつて鼻塚の靈魂の還国運動が起こつた。その結果、一九九二年一月二四日、京都の耳塚に続き、当地の靈魂を帰国させるための「鼻塚靈魂還国奉送韓日合同慰靈大法要」が開催され、二日後の一二月二六日に、全羅北道扶安市郊外のホボルテイ戦跡地で「壬辰倭乱鼻塚還国英靈追慕大会」が行われた後、靈魂が埋められた。
- (93) 琴秉洞、前掲『耳塚』、一〇二頁。
- (94) 同。
- (95) 同。
- (96) 仲尾宏、前掲書、八七頁。
- (97) 仲尾宏、前掲書、九二頁。

- (98) 仲尾宏、前掲書、一〇七頁。
- (99) 仲尾宏、前掲書、一〇七—〇九頁。
- (100) 仲尾宏、前掲書、一一〇頁。
- (101) 同。
- (102) 『京都日出新聞』一九二二年七月六日付。
- (103) 姜沆、前掲書、二三〇頁。
- (104) 李景稷、前掲書、七八頁。
- (105) 姜弘重、前掲書、二五四頁。
- (106) ロナルド・トビ、前掲論文、五頁。
- (107) 辛基秀『朝鮮通信使の旅日記』PHP研究所、二〇〇二年、一三三頁。
- (108) 辛基秀『新版 朝鮮通信使往來の旅日記——江戸時代二六〇年の平和と友好』明石書店、二〇〇二年、七六頁。
- (109) 曹命采、前掲書、二四九頁。
- (110) 南玉著、李慧淳監修、김보경 역 『日觀記——북끝으로富士山바람을가르다』召命出版、二〇〇六年、三七二—七三頁。
- (111) 柳田国男、前掲書、

- (112) 『京都日出新聞』一九三九年三月一六日付。
(113) 田中緑紅、前掲書、「大佛の耳塚」に対する解説文参照。
(114) 『京都日出新聞』一九三九年三月三〇日付。

参考文献

- 姜沆「看羊録」『国訳海行摠載1』民族文化推進会、一九八九年。
姜弘重「東槎録」『国訳海行摠載3』民族文化推進会、一九八九年。
慶暹著、鄭鳳華訳「海槎録」『国訳海行摠載2』民族文化推進会、一九八九年。
金文吉「宇喜多秀家と六助に関する研究——備前市香登にある「鼻塚」について」『比較文化研究』5、釜山外国語大学文化研究所、一九九四年。
金文吉『壬辰倭乱은文化戰爭이다』慧眼、一九九五年。
魯成煥『日本 속의 韓国』蔚山大学校出版部、一九九七年。
南玉著、李慧淳監修、김보경 역『日觀記——붓끝으로 富士山 바람을 가르다』召命出版、二〇〇六年。
元重挙著、李慧淳監修、朴在琴訳『華国志』召命出版、二〇〇六年。
李景稷「扶桑録」『国訳海行摠載3』民族文化推進会、一九八九年。

李睟光 『芝峯類說上』 乙酉文化社、一九八二年。

李離和 『韓國史 이야기 (11) 朝鮮과 日本의 七年戰爭』 한길사、二〇〇〇年。

李在範 「왜 朝鮮人の 코를 잘라 갔는가」 『韓國과 日本 歪曲과 콤플렉스의 歷史(2)』 자작나
무、一九九八年。

柳成龍著、李民樹訳 『懲愆錄』 乙酉文化社、一九七〇年。

鄭在貞 『京都에서 본 韓日通史』 효형출판、二〇〇七年。

曹明采 「奉使日本詩文見録 坤聞見總録」 『國訳 海行摠載10』 民族文化推進會、一九八九年。

趙重華 「코무덤의 憤怒」 『마로잡』 『壬辰倭亂史』 삼과꿈、一九九八年。

崔官 『日本과 壬辰倭亂』 高麗大學校出版部、二〇〇三年。

雨森芳洲 『芳洲外交關係資料·書翰集 雨森芳洲全書3』 関西大學出版部、一九八二年。

飯倉照平編 『柳田國男·南方熊楠往復書簡集下』 平凡社、一九九四年。

今村鞆 『歷史民俗朝鮮漫談』 復刻版、國書刊行會、一九九五年。

上田正昭 『雨森芳洲』 ミネルヴァ書房、二〇一一年。

河内將芳 『秀吉の大仏造立』 法藏館、二〇〇八年。

神田千里 『信長と石山合戦——中世の信仰と一揆』 吉川弘文館、一九九五年。

北島万次 『朝鮮日日記·高麗日記——秀吉の朝鮮侵略とその歷史的告發』 そしえて、

一九八二年。

北島万次『豊臣秀吉の朝鮮侵略』吉川弘文館、一九九五年。

北島万次『秀吉の朝鮮侵略と民衆』岩波書店、二〇一二年。

金光哲『中近世における朝鮮観の創出』校倉書房、一九九九年。

清河八郎著、小山松勝一郎校注『西遊草』岩波文庫、一九九三年。

黒川道祐著、立川美彦訓読『雍州府志』臨川書店、一九九七年。

琴秉洞『耳塚』二月社、一九七八年。

琴秉洞「秀吉の耳塚築造の意図とその思想的系譜」金洪圭編『秀吉・耳塚・四百年——豊臣

政権の朝鮮侵略と朝鮮人民の闘い』雄山閣出版、一九九八年。

辛基秀『朝鮮通信使の旅日記』PHP研究所、二〇〇二年。

辛基秀『新版 朝鮮通信使往来の旅日記——江戸時代二六〇年の平和と友好』明石書店、

二〇〇二年。

清水克行「耳鼻削ぎの中世と近世」黒田弘子・長野ひろ子編『エスニシテイ・ジェンダーか

らみる日本の歴史』吉川弘文館、二〇〇二年。

仲尾宏『朝鮮通信使と壬辰倭乱』明石書店、二〇〇〇年。

仲尾宏「朝鮮通信使と耳塚——江戸時代の〈耳塚〉観と壬辰、丁酉戦乱」金洪圭編『秀吉・

耳塚・四百年』雄山閣出版、一九九八年。

西川宏『岡山と朝鮮』日本文教出版、一九八二年。

高木博志著、小幡倫裕訳「近代日本と豊臣秀吉」『壬辰戦争——一六世紀日・朝の国際戦争』

明石書店、二〇〇八年。

田中緑紅編『京のおもかげ下』郷土趣味社、一九三二年。

圭室諦成『葬式仏教』大法輪閣、一九六四年。

南方熊楠『南方熊楠全集9』平凡社、一九七三年。

柳田国男「耳塚の由来に就て」『定本柳田国男集12』筑摩書房、一九六三年。

山崎泰正『信長、秀吉、京の城と社寺』ふたば書房、二〇一一年。

山田雄司『跋扈怨霊——鎮魂の日本史』吉川弘文館、二〇〇七年。

渡辺勝義「日本精神文化の根底にあるもの——怨親平等の鎮魂について」『現代社会学部紀

要』四—一、長崎ウエスレヤン大学、二〇〇六年。

テレングト・アイトル「戦争と鎮魂——元軍戦死者怨霊追善碑」『北海学院大学人文論集』

三二、北海学院大学、二〇〇五年。

ロナルド・トビ「近世の都名所 方広寺前と耳塚——洛中洛外図、京絵図、名所案内を中心

に」『歴史学研究』八四二、歴史学研究会、二〇〇八年。

発表を終えて

私は2012年8月1日から13年7月31日まで国際日本文化研究センターの外国人研究員として勤めました。ちょうど1年です。2013年8月に韓国へ帰り、職務地の蔚山大学校に戻りました。私にとって1年間の日文研の生活はとても幸せなものでした。久しぶりに大学の教育と公務から解放されてもっぱら研究に没頭することができたからです。特に効率的に研究できたのには、次のようないくつかの要因が考えられます。

第一に、日文研からの経済的な支援があったこと、第二に、日文研の立派な図書館と有能な司書の協力があったこと、第三に、すばらしい職員（特に研究協力課、コモンルームのスタッフ）の助力があったこと、第四には優れた日本人研究者と共同研究ができたこと、第五に、世界各国から来た外国人研究者と学術的な交流ができたこと、第六には快適な住居と周辺自然环境があったことです。最後に、ほぼ週一回の楽しい「飲み会〈日文研サミット〉」を通じて、外国人研究者と親睦を深めたことも見逃せない喜びでした。以上のように、日文研から学問の種を沢山いただきました。今後、日文研を離れて国へ帰り、それらを一所懸命に蒔いて収穫を待つのが私の使命であり、もう一つの幸せだと思います。

私が日文研に滞在しながら取り組んだ主な研究課題は、「日本の神になった朝鮮人」です。もう少し細かく申しますと、文禄・慶長の役の際、捕虜になった朝鮮人の中で日本の神になった人たちがいます。朝鮮出兵した日本軍は、大勢の朝鮮人を拉致連行して帰国しました。その数は6万から14万人など諸説があります。その中では奴隷として海外に売られた人も沢山いました。日本での彼らの生活は決してよかったとは言えません。その悪い状況のなかで、日本の神になった人たちがいるのです。私の仕事は、彼らがどういうわけで神になったのかを文献と現地調査を通して具体的に分析することです。日文研フォーラムでご紹介した耳塚の話は、その研究の一部です。特に耳塚は、京都にある負の文化遺産です。あくまでも韓国の立場から見た私の主観的な意見ですので、あまり誤解なさらず、楽しく読んでいただき、少しでも韓国と日本の文化の違いをわかっていただければ何より幸いです。

日 成 興 大